

例　　言

1. 本書は、松江市教育委員会、財団法人松江市教育文化振興事業団が平成17、18年度に実施した鶴灘山遺跡・大勝間山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、松江市教育委員会教育総務課から依頼を受け、実施したものである。
3. 調査組織は下記のとおりである。

【平成17年度】

主体者　松江市教育委員会
事務局　松江市教育委員会 教育長　福島 律子
　　　　　文化財課 課長　岡崎雄二郎
　　　　　調査係 係長　飯塚 康行
実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団
　　　　　理事長　松浦 正敬
　　　　　専務理事　長野 正夫
　　　　　事務局長（埋蔵文化財課課長 兼務）　松浦克司
　　　　　調査係長　瀬古 諒子
調査者　調査員　江川 幸子
　　　　　調査補助員　野津 哲志

【平成18年度】

主体者　松江市教育委員会
事務局　松江市教育委員会 教育長　福島 律子
　　　　　文化財課 課長　岡崎雄二郎
　　　　　調査係 係長　飯塚 康行
実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団
　　　　　理事長　松浦 正敬
　　　　　専務理事　長野 正夫
　　　　　事務局長　松浦 克司
　　　　　課長　廣江 真二
　　　　　調査係長　瀬古 諒子
調査者　調査員　江川 幸子
　　　　　調査補助員　野津 哲志（4・5月）
　　　　　大森 義和（2・3月）

4. 調査の実施及び報告書の作成にあたっては、下記の方々より多人なご指導、ご教示、ご協力をいたいたいた。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

松江市立鹿島中学校、井上道明（土地所有者）、中島寿郎（土地所有者）、中島松子（土地所有者）、中島精三（土地所有者）、木村文雄（土地所有者）、西尾克巳（島根県教育委員会）、原山敏照（島根県教育委員会）、勝部智明（島根県教育委員会）、石井悠

5. 現地調査参加者は下記の方々である。

【平成17年度】

- ・鶴瀧山遺跡 山中和美、秦岡富士子、細田勇治、細田信子、吉岡永子、和田允
- ・人勝間山城跡 山中和美、秦岡富士子、細田勇治、細田信子、吉岡永子、角田ミヤ子
木村俊弘、高橋穂、吉川毅

【平成18年度】

- ・人勝間山城跡 山中和美、秦岡富士子、細田勇治、細田信子、吉岡永子、角田ミヤ子、今
村正人、今村邦子、吉岡啓三郎、井上幸夫

6. 本書の作成には下記の者が携わった。

- (遺物整理・実測) 善家幸子、高尾万里子、田中和美、北島和子、野津里佳、野津哲、江川
(図面作成) 野津哲、江川
- (写真撮影) 野津哲、江川
- (執筆・編集) 江川

7. 本書の執筆は第1章を飯塚(松江市教育委員会)、その他は江川がおこなった。編集は江川がお
こなった

8. 本書で使用した造構記号は、以下のとおりである。

S1…堅穴建物、SD…溝、sd…造構内の溝、SX…性格不明の造構、P…ピット

9. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。



酷暑の中の作業風景

本文目次

第1章 調査に至る経緯.....	1
第2章 位置と歴史的環境.....	2
第3章 調査の概要	
(1) 調査区の設定と調査の経過.....	5
(2) 鶴鶲山遺跡調査報告.....	6
(3) 大勝間山城跡調査報告.....	26
第4章 結びにかえて	34

遺物観察表

写真図版

報告書抄録



第1図 松江市位置図

挿 図 目 次

第1図	松江市位置図	
第2図	鶴瀧山遺跡・大勝間山城跡位置図	1
第3図	周辺の遺跡分布図(1/25000)	3
第4図	鶴瀧山遺跡と大勝間山城跡の位置関係図	5
第5図	鶴瀧山遺跡調査前地形測量図	6
第6図	鶴瀧山遺跡調査成果図	7
第7図	鶴瀧山遺跡セクション尖測図	8
第8図	S101遺構尖測図	9
第9図	S101遺物出土状況実測図	10
第10図	S101周縁の溝SD01出土土器実測図	11
第11図	S101遺構面と周辺出土上のグリーンタフ製管瓦ほか実測図	12
第12図	S101搅乱部出土土器実測図	13
第13図	S101四方の灰色粘質土出土土器実測図	13
第14図	遺物包含層出土石器・鉄滓実測図	14
第15図	加工段01遺構実測図	14
第16図	P1埋上出土土器実測図	14
第17図	SD01・SD02遺構検査状況図	15
第18図	SD03遺構実測図	15
第19図	自然流路尖測図	16
第20図	溝状遺構 SD04・段状遺構 SX01実測図	17
第21図	加工段02遺構実測図	18
第22図	SX02遺構尖測図	18
第23図	SX02のピット十層断面図	18
第24図	SX02遺構面出土土器実測図	19
第25図	SD05・S102の遺物出土状況及び遺構実測図	20
第26図	SD05周辺出土土器実測図・遺物包含層出土土器実測図	20
第27図	遺構に伴わない土器実測図	21
第28図	石器実測図(敲石類)	22
第29図	石器尖測図(砥石)	23
第30図	在地系擂鉢実測図	23
第31図	大勝間山城跡復元図	26
第32図	大勝間山城跡調査範囲及び調査前地形測量図	27
第33図	大勝間山城跡平坦面調査範囲及びトレンド設定図	28
第34図	A-A'セクション尖測図	29
第35図	B-B'セクション実測図	30
第36図	C-C'セクション実測図	31
第37図	庵島町を中心とする中世の山城と佐陀川	33

第1章 調査に至る経緯

鹿島中学校は、昭和33年に恵美、御津、佐太、講武の4つの中学校を統合して設置された中学校である。

しかし、築後45年以上が経過して老朽化が目立ち、現在の耐震基準にも見合わなくなつて来たため、平成12年度に施設整備検討委員会が設置されて検討された結果、平成22年完成の予定で校舎や屋内外運動場の整備が行われることとなつた。

この整備計画では、学校の敷地も一部拡張が検討されたが、その一部が周知の遺跡である「鶴瀬山遺跡」、「大勝間山城跡」の範囲に含まれていた。このため遺跡の取扱いについて松江市教育委員会教育総務課と協議を行つたが、工事計画の変更が困難であったため、事前に発掘調査を実施することとなつた。

調査の実施期間は以下のとおりである。

（鶴瀬山遺跡） 平成17年8月1日～平成17年10月21日

（大勝間山城跡） 平成17年11月7日～平成17年11月9日

平成19年2月1日～平成19年2月8日



第2図 鶴瀬山遺跡・大勝間山城跡位置図

第2章 位置と歴史的環境

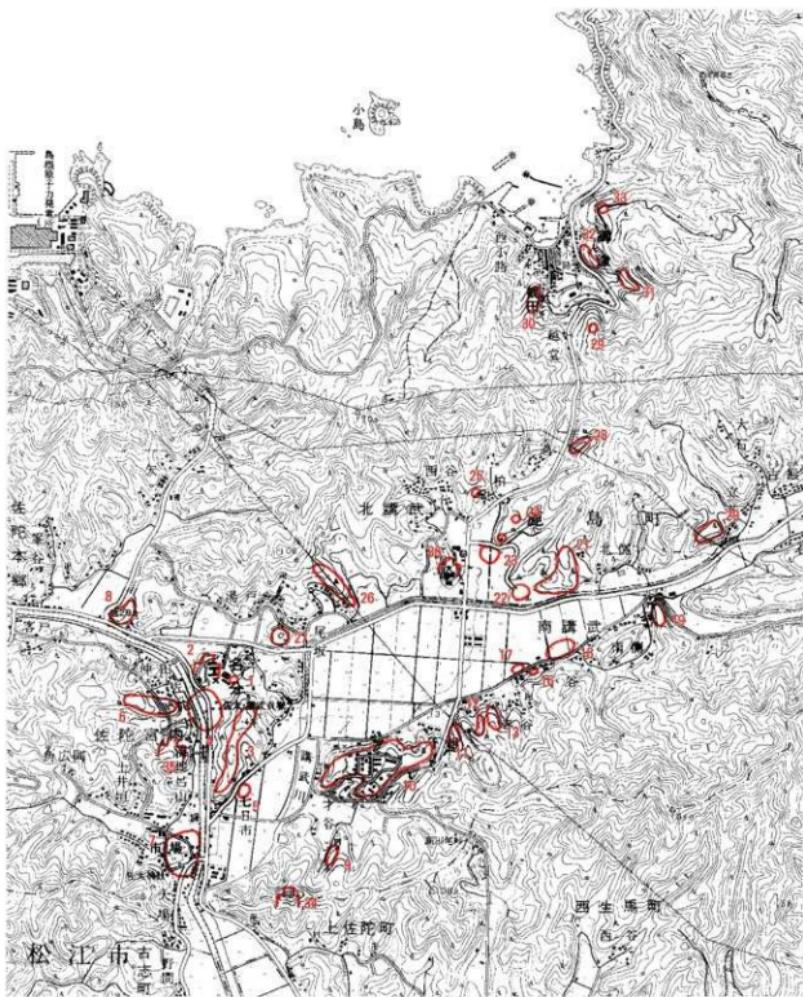
鶴瀬山遺跡は島根県松江市鹿島町名分741-1他2筆、大勝間山城跡は松江市鹿島町名分656-1他3筆に所在する（第3図）。

鹿島町には講武川の沖積作用によって造られた、狭いながらも肥沃な講武盆地が存在し、その盆地の周囲は比較的低い山々によって囲まれている。上記の2遺跡はその講武盆地のはば西端に位置している。現在は松江市立鹿島中学校の隣接地であり、西側には佐陀川が流れている。この佐陀川は江戸時代に運河として整備されたもので、本来は講武盆地から宍道湖方向へ流れている多久川、日本海寄りに存在していた恵義堤が原形となっている。奈良時代に編纂された『出雲國風土記』には、「佐太河。源は二つ。東の水の源は、島根の郡の所謂多久川、是也。西の水の源は秋鹿の郡渡の村より出づ。二つの水合ひて、南へ流れて佐太の水海に入る。即ち水海の周り七里。鮎有り。水海は入海に通る。潮の長さ一亩五十歩、広さ一十歩。」とあり、「恵義の堤。周り六甲。鷺鳥・鷹・鴨・鮎在り。四の辺に葦・桜・菅生ふ。養老元年より以往は、荷渠、自然に叢がり生ひて太だ多かりき。二年より以降、自然に亡失せて、都べて一茎無し。俗人云はく、其の底に陶器・壺・甕等の類多く有り。古より時々人溺れ死ぬ。深き浅きを知らず。」と記されている。両遺跡南方の佐太水海、西方の恵義堤は時代によつて規模や形状を変えながら佐陀運河が開削されるまで存在してきたと思われる。両遺跡から現在の佐陀川沿いを西へ向かえば恵義堤を経て日本海の恵義港に至り、講武盆地の中央を北東へ山越えすれば日本海の御津港に至る。佐陀川を南に下れば佐田水海を経て宍道湖へと至ることができ、まさに交通の要衝地と言える。海や川、湖沼、山の幸に恵まれ、原始稲作に都合の良い低湿地も広がっており、佐陀川沿いや講武平地周辺は古くから生活しやすい場所であったものと思われる。

鹿島町はこのような地形であるから、あたり一面が遺跡の宝庫となっている。以下で時代ごとに周辺遺跡の概要について簡単に紹介する。

・縄文時代 非常に有名な遺跡として、1933年に国指定史跡となった佐田講武貝塚がある。奈良時代に編纂された『出雲國風土記』によれば、付近は佐田水海や恵義被の前身にあたる穂やかな内海に恵まれていたようで、貝塚から出土した貝類はヤマトシジミを中心とした汽水性のものが大半を占めていた。これまでの調査報告によれば半として前期と晩期の土器が多く出土したようである。ただし、近年の調査によって、現在知られている貝塚は佐陀川開削工事の際に揚げられたことが確認されており、本来貝塚が広がっていた正確な範囲はわかつていない。また、貝塚を形成した人々の居住域についても分かっておらず、今後の重要な課題となっている。そのほかの遺跡としては、後期～晩期の土器が多量に出土した講武平野の掘部第1遺跡、晩期の土器が少々出土し北講武氏元遺跡などが知られている。

・弥生時代 北講部氏元遺跡から遠賀川式土器が出土して前期の住居跡と推察されている。その近くの堀部第1遺跡からは同時期の土器を作った60余基の墳墓が検出されている。墳墓の形態は「見土塚墓」であるが、木棺や木棺の痕跡が残存しており、標柱となる石材が使用されているのがこの大墳墓群の特徴といえる。また、古浦砂丘遺跡も著名である。海浜部の砂丘の下から60体以上の人骨が発見されており、なかでも頭蓋骨の額部分に青銅の縄錆がついた人骨はシャーマンを連想させる興味深いものである。佐太前遺跡は部分的な調査しかおこなわれていないが、前期から幅広い年代の遺物が出土しており、この地域の拠点集落となっていたことが知られている。中期では、佐太前遺跡のほか稗田遺



第3図 周辺の遺跡分布図 (1/25000)

1. 鶴淵山遺跡 2. 大勝間山城跡 3. 蓼瀬山古墳群 4. 佐太講武日塚 5. 名分塚州遺跡 6. 免田古墳群
 7. 佐太前遺跡 8. 名分丸山古墳群 9. 嵐櫻橋穴墓群 10. 貴才古墳群 11. 南講武大口遺跡
 12. 清水の奥横穴墓群 13. 中尾谷山古墳群 16. 南講武小堀遺跡 17. 南講武小堀第2遺跡 18. 南講武草田遺跡
 19. 多久神社裏古墳群 20. 岩鼻古墳群 21. 烟部古墳群 22. 摂船第1遺跡 23. 北講武式元遺跡 24. 向山古墳
 25. 北講武岩屋古墳 26. 尾坂古墳群 27. 藤山古墳・藤山遺跡 28. 恵谷柄穴墓群 29. 的松古墳
 30. 芦葉山古墳群 31. 御津貝塚横穴墓群 32. 御津茶畠柄穴墓群 33. 御津中の津古墳 34. 海老山城跡
 35. 芦山城跡 36. 小田山城跡

跡、名分塚田遺跡、志谷奥遺跡等が知られている。志谷奥遺跡からは銅劍 6 本、銅鐸 2 個とその埋納壙が見つかっている。神無火山、朝日山の山麓にあたることからその関連性が検討されている。後期に入ると、南講武草田遺跡から多量の上器が出土している。搬入品と考えられる庄内式土器が多数含まれていたことから、地域間交流が草の根的により活性化したことを窺わせるものといえる。

・古墳時代 奥才古墳群は大小 50 余基から構成される前期の大古墳群で、主体部は細長い木棺または石棺で屍床は小石敷きのものが多数を占めている。副葬品として鏡類や玉類、石劍、鐵製品などを伴うものがあり、有力者の埋葬施設が存在したことを示している。奥才古墳群に向かい合う丘陵、鶴灘山に位置する鶴灘山古墳群は未調査であるが、中型の柄鏡形前方後円墳が存在することから、前期に位置づけられるものと推測されている。後期では向山古墳、岩屋古墳のはか横穴墓多数が確認されている。墓域は日立つためよく知られているが、居住遺跡で知られているのは、現時点では佐太前遺跡と鶴灘山遺跡くらいである。

・歴史時代 奈良時代に書かれた『山雲国風上記』によれば、秋鹿郡の項に「佐太河。源は二つ。」とある。これより鹿島町は佐陀川付近から西が秋鹿郡、講武平野の東側が鳥根郡に含まれていたことがわかる。奈良時代から平安時代にかけての遺物が出土する遺跡は、北講武氏元遺跡や古浦遺跡など多数存在するが、遺物の出土量自体は多くない。

中世には佐太神社が栄え、莊園を管理した人々が多く山城を築いている。築城年代が文献から推測できる山城の内、最も古いのは鎌倉時代前期に佐々木氏が築城した講武殿山城、次は室町時代前期に朝山氏が築城した池平山城、そして芦山城、室町時代後期の海老山城、大勝間山城である。鹿島町内にはその他にも 4ヶ所の山城が確認されているが、それらの位置づけについてはわからない。それにしても、佐陀川沿いを中心に複数の山城が密集している状況をどのように考えたらよいのであろうか。池平山城と芦山城はともに朝山氏の城であるから問題はないとして、尼子方の地頭が居城した海老山城そして大勝間山城が朝山氏の山城に非常に近接した場所に築かれている。特に芦山城と大勝間山城は鶴灘の湿地（この時期は佐陀川はまだ無い）を挟んです向いに位置しているといっても過言ではないのである。

近世に入ると、清原太兵衛によって運河佐陀川の開削がおこなわれ、難工事の末に天明年間に完成している。佐陀川は現在の宍道湖と日本海を繋ぐもので、この開通により当時の水田開発はもちろん、日本海の新鮮な魚介類を松江城下に運んだり、また逆にさまざまな物資が持ち込まれたり等、大きな経済的発展効果がもたらされたことは想像に難くない。

（参考文献）『氏穴遺跡発掘調査概報』鹿島町教育委員会 1983年

『奥才古墳群』鹿島町教育委員会 1985年

『講武地区原宮塚場整備事業発掘調査 4』鹿島町教育委員会 1989年

『佐太講武日塚発掘調査報告書』鹿島町教育委員会 1993年

『佐太講武貝塚発掘調査報告書 2』鹿島町教育委員会 1994年

『下谷遺跡・稗田遺跡』鹿島町教育委員会 1994年

『佐太講武貝塚』鹿島町教育委員会 1997年

『塙部第 1 遺跡』鹿島町教育委員会 2005年

ほか多数

第3章 調査の概要

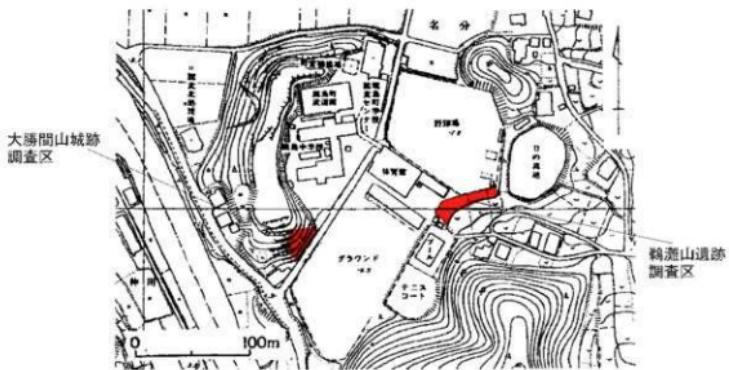
(1) 調査区の設定と調査の経過

鶴瀬山遺跡は、1993年に八束郡鹿島町教育委員会（松江市合併以前）がトレンチ調査によって遺構、遺物の出土を確認した周知の遺跡である。この遺跡の一部が鹿島中学校の校地拡張計画の範囲に入り、教室棟の一部が建設される予定もあることから、開発範囲400m²（第5図）について企画発掘調査を実施することとなった。

また、鹿島中学校に西接する勝間山も中世の山城、大勝間山城という周知の遺跡であり、ここも校地拡大に伴い一部が削平される予定範囲に入っているため発掘調査の必要があった。調査面積は100m²である（第4図）。山頂付近に若干の平坦地があるものの、ほとんどは急な斜面で占められているので、平坦地のみ平面発掘調査を実施して遺構の検出に努め、急斜面については、山頂から山裾まで通したトレンチ2本を設定し、築城状況の上層観察をおこなうことにした。

鶴瀬山遺跡他発掘調査の計画は旧八束郡鹿島町時代に策定されたもので、それによれば、発掘調査は員数2、総面積500m²を、勝間山の立木伐採期間および概要報告書の作成を含めて平成17年8月から11月までの4ヶ月間で終了せねばならなかった。また、当時作成された調査予算書が残っており、それは異常なほど少額なものでとても調査を実施できるようなものではなかった。そこで、松江市教育委員会と協議をおこなってわずかばかりの予算増額に成功したが、その増額分も微々たるものであった。鶴瀬山遺跡の調査については重機を大胆に利用して人件費を抑え、人勝間山城跡の調査については地形の制約上重機の使用ができなかったため、男性作業員を増員して短期決戦という非常手段をとらざるを得なかった。暑い中、寒い中、休憩小屋も無かったが、作業員の方々の献身的な協力のおかげで調査はスケジュール通りに進めることができたようだ。

ところが、調査依頼者が担当する人勝間山城跡の立木伐採については、最後の上塙場になって調査区最東端の地権者の方から許可が得られないという事態が起こり、その場所の調査は平成18年度以降に延期せざるを得なくなった。その後平成19年1月に許可を得て立木伐採が終了したので、平成19年2月中に発掘調査を実施し、鶴瀬山遺跡他発掘調査事業を全て終了した。



第4図 鶴瀬山遺跡と大勝間山城跡の位置関係図

（石井悠「鹿島町内の中世城郭」『研究集録』八束郡鹿島町立鹿島中学校（1992年3月）より転載・加筆）

(2) 鶴瀧山遺跡

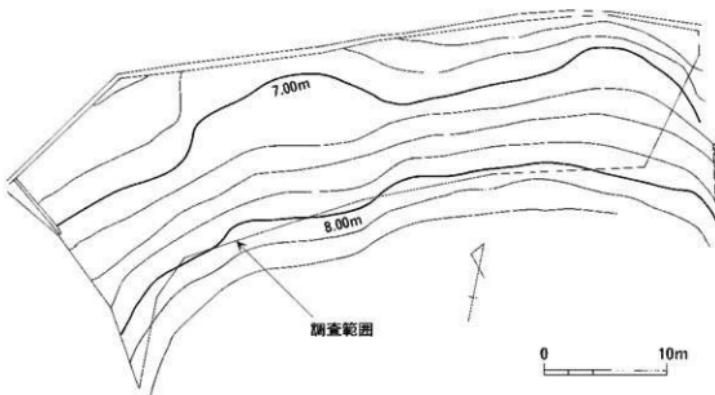
調査は平成17年8月1日から10月21日の間、のべ52日間おこなった。

調査区は北側が低くなる緩斜面で、茶や豆類が作られている畠地であった（第5図）。調査区の南側は独立丘陵、鶴瀧山で、その尾根筋には古墳時代前期と推察される古墳群が分布している。調査区の北は鹿島小学校の野球場となっているが、中学校が建設される以前は水田が広がる低地であったといふ。

この調査区の隣接地では、平成5年に鹿島町教育委員会（松江市合併以前）が佐太講武具塚関連のトレンチ調査を実施しており、遺物包含層から弥生時代前期から後期にかけての土器片が出土しているほか、地山面からしっかりした上層が検出されている。

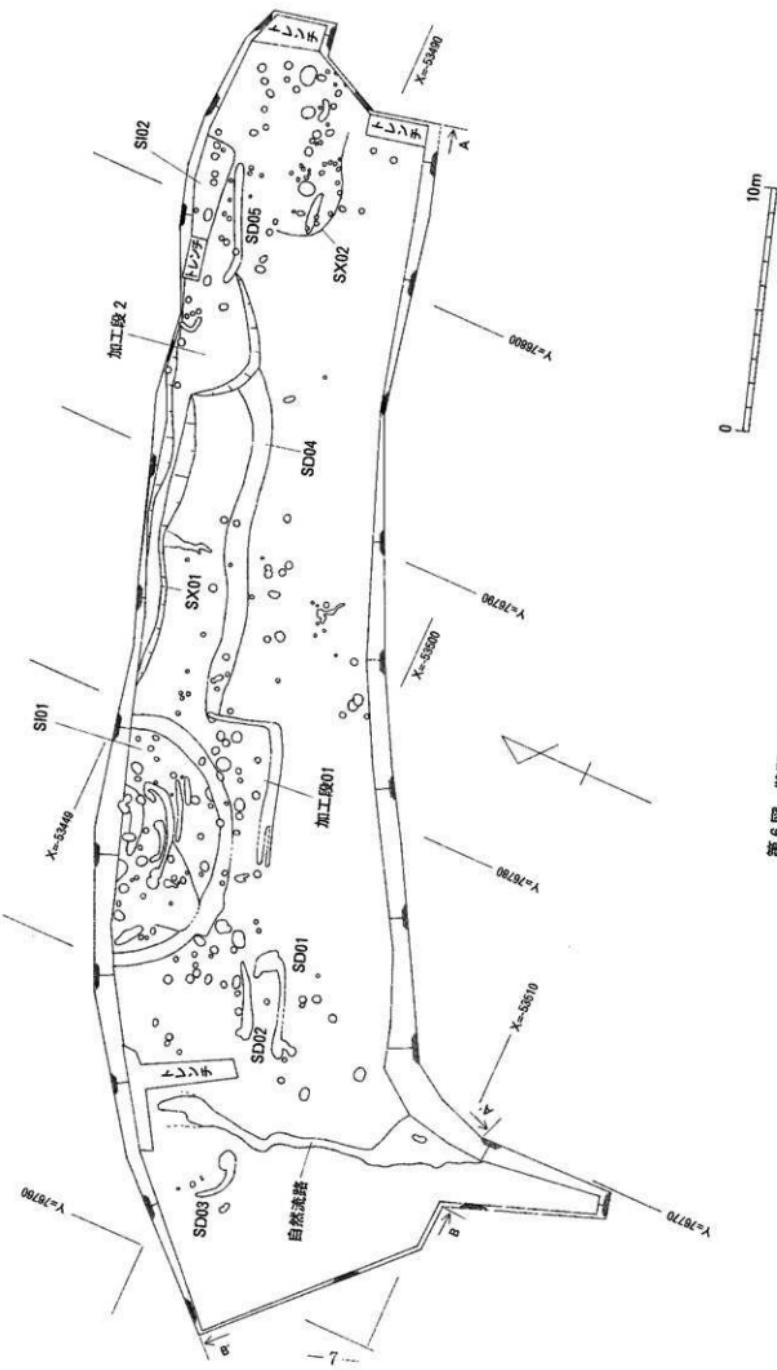
トレンチ調査の報告書を参考にして、調査区の層序についてはおおよその見当がついていたので、まず重機を使用して遺物包含層上面までの掘り下ろしをおこなった。調査区西寄りでは遺物包含層が薄く、弥生上器もしくは上師器系の小破片が多数出土したが（第26図）、真夏の太陽の下で乾燥してかちかちに固まる土質であったためほとんど取り上げることは不可能であった。また、取り上げることができても土器の表面が土の方に貼りついて本来の形状をとどめないものが大半を占めた。東方に進むほど遺物包含層は薄くなり、ついには耕作土直下が地山面という場所も多く存在した（第7図）。

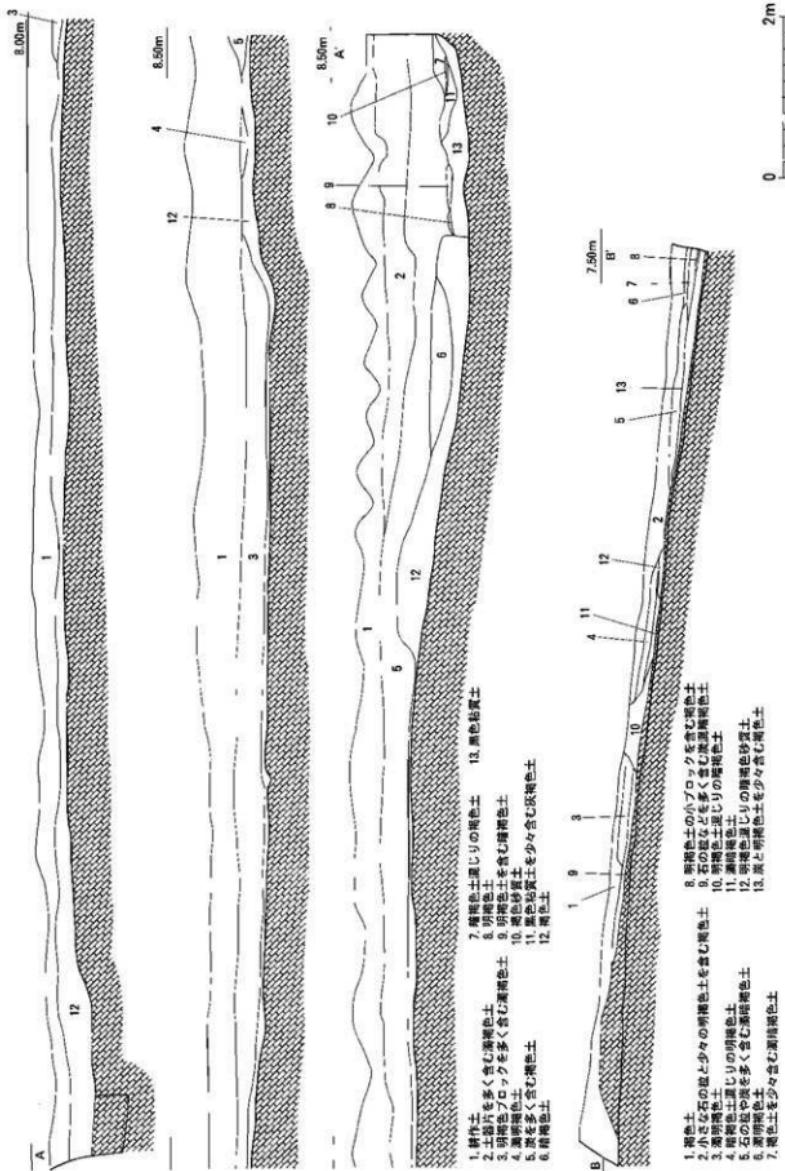
具体的に記すと、調査区西側は上記したとおり遺物包含層が厚めで、南で特に厚くて北へ下がるほど薄くなる傾向がみられた。遺物包含層中から出土した遺物は、以前のトレンチ調査の時とはややその様相が異なり、弥生時代後期初頭の壺と甕、土師器の塊形土器および須恵器の焼小片、敲石等が出土した。遺構としては（第5図）、堅穴建物1棟（S101）と加丁段1ヶ所（加丁段01）、溝状造構3本SD01～03）、自然流路1本、性格不明のピット多数を検出した。調査区中央付近は、遺物包含層が存在せず茶畠の耕作上のはば直下が地山面となっていた。遺構としては東西に長い断面J字状の浅い溝（SD04）と若干のピットを検出し、調査区北寄りでは性格不明の段状造構（SX01）を検出した。遺物はほとんど出土しなかった。調査区東側では、遺構面と耕作土の間にわずかに炭を含む層が



第5図 鶴瀧山遺跡調査前地形測量図

第6圖 錦雞山遺跡調查成果圖





第7図 鶴澤山遺跡セクション実測図

あったが、それは遺物包含層というよりは遺構上面と考えた方が適切と思われる。埋土中には各時代の遺物が混入していたが、中世の比率が高いようであった。遺構としては、浅い掘りこみの中に東西方向に等間隔にならぶ4穴の柱列（SX02）のほか多数のピットを検出し、北寄りでは加工段1ヶ所（加工段02）、竪穴建物1棟（SI02）、溝1本（SD05）を検出した。

以下で遺構ごとに概要を記す。

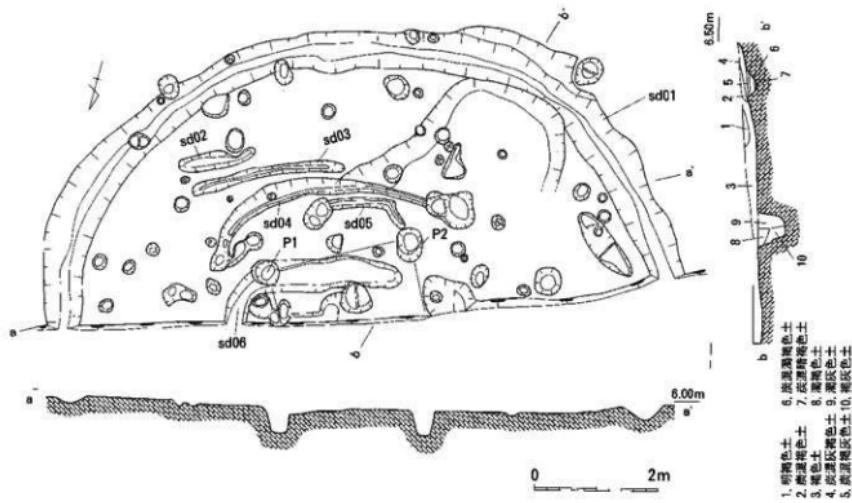
① 竪穴建物 SI01

遺構

周囲に溝のある円形の竪穴建物で、約半分が調査区外に存在する（第8図）。

床面の掘り下げ痕跡が残っていないため、床面の広さは不明である。ただ、床面の周縁に掘られたと思われる弧状の溝sd01がわずかに残っており、その溝のカーブから復原すると、床面は直径5.5m程度の円形であったと推察される。sd01は上端幅18~40cm、長さ約3mが残存していた。上屋の建物は4本柱を主柱にするものらしく、その内の2柱穴は確認でき、P1は上端径40cm、下端径25cm、深さ40cm、P2は上端径40cm、下端径20cm、深さ40cmを測るものであった。2穴の芯々距離は2.7mである。他の2穴は調査範囲外に存在する。

この竪穴建物に伴う施設としては、床面と屋外の溝との間に掘られた長さ1.3m、上端幅30cm、深さ5cm前後の直線的な溝sd02、sd02とsd04の間に位置する、長さ2.5m、上端幅35cm深さ6cmの直線的な溝sd03があり、sd03の底部からは管玉木製品が出土した。また、床面上でsd04に沿うように掘られ一部カギ状に曲がる上端幅20cm前後、深さ5cmの溝sd05、P1にかかるようにI状に掘られた上端幅50cm、深さ7cmの溝sd06がある。sd06内には少量の上器片と炭もしくは炭化した木



第8図 SI01遺構実測図

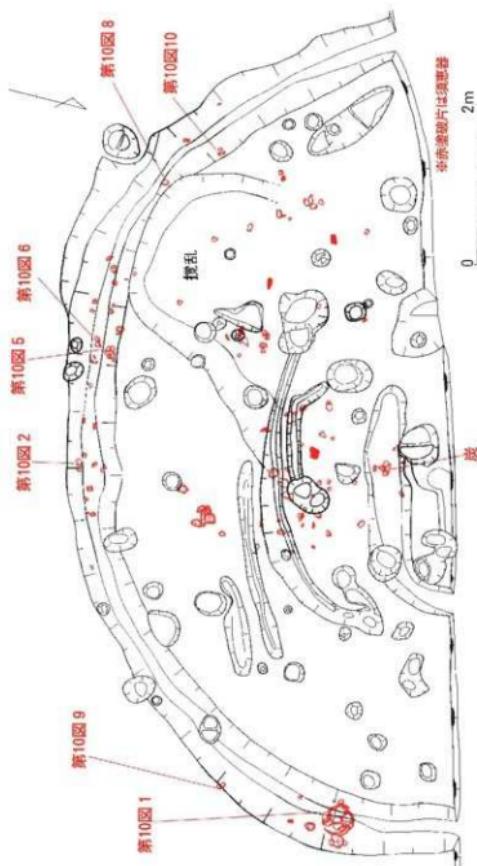
片が入っていた。

屋外に掘られた平面プラン円形の溝 sd 01は、上端幅60cm前後で断面はVに近いU字状を呈しており、円弧の直径は10mを測る。この溝の一番深いところは地形が最も高い南側で、そこで深さは約30cmであった。埋土は下層から炭混暗褐色土、炭混褐色土、炭混淡灰褐色土で、どの層から多くの遺物が出土した。

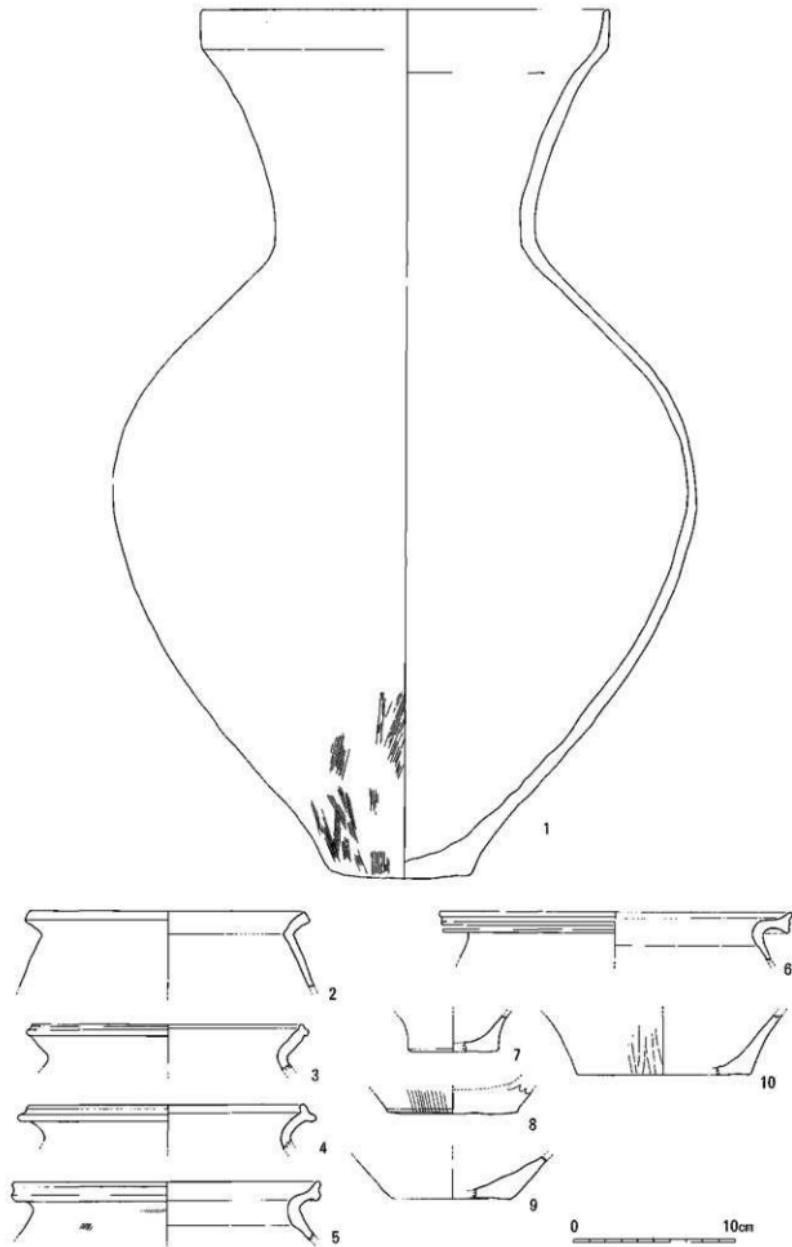
以上、遺構について記したが、S 101は後世に大きく搅乱、削平を受けているため遺構の遺残状況は極めて悪かった。建物内で原位置を保つ弥生土器は全く出土しなかった。

遺物

S 101の中で屋外の溝 sd 01の遺物残存状況だけは良好であった（第10図）。1は故意的に溝に立て掛けられたような状態で出土したほぼ完形の壺で、復原口径24.9cm、頭径15.9cm、胴部最大径35.4cm、



第9図 S 101遺物出土状況実測図

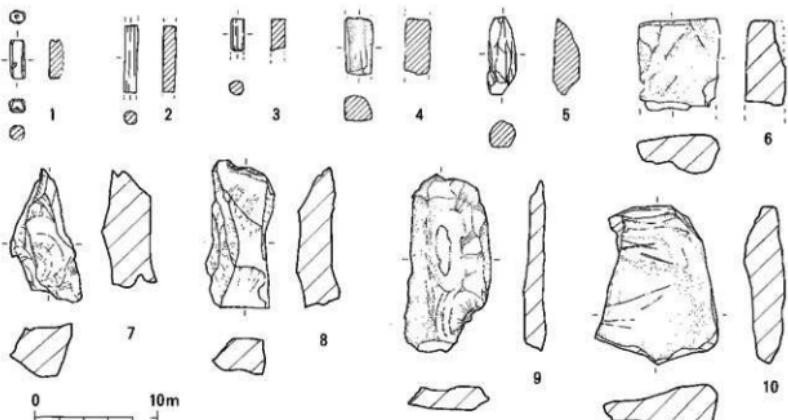


第10図 S101周縁の溝 SD01出土土器実測図

底径8.7cm、器高50cmを測る大型品である。器壁の風化が著しく、底部外面に一部ハケメの痕跡を見出すことができるが、器面のほとんどは表面が剥離していて調整や文様の有無は不明である。実際の器壁の厚みは圓筒化したものよりもかなり厚いものである。この壺の特徴は、若干開いた口縁の端部がやや内傾気味に垂直に立ち上がる点である。西部瀬戸内系の流れをくむものかとも考えられるが、器面剥離が著しく表面観察ができない状況にあるため安易な検討は避けることにする。2は蓋で、器面剥離のため詳細はわからないが、口縁口唇部は平坦に作られ復原口径16.8cm、復原頸径15.3cmを測る。3～5は口縁口唇部に1条の凹線が巡る壺で、3は復原口径16.2cm、復原頸径14.6cm、4は復原口径16.5cm、復原頸径15cmを測る。5は外面の一部にハケメ、内面にケズリの痕跡がわずかに残り、復原口径18.3cm、復原頸径16.5cmを測る。6は口縁口唇部に2条の凹線が巡るもので、復原口径27cm、復原頸径17.4cmを測る。7～10は底または裏の底部で、復原底径は7が5.4cm、8が7.8cm、9が7.2cm、10が10.6cmを測る。8の外面にはハケメ、10の外面上にはヘラミガキ調整が見られる。全体を見渡すと、松本編年V-1様式のうちに収まるようである。弥生時代後期初頭の土器群と判断する。

土器以外の遺物としては、グリーンタフの玉未成品や石材、敲石等が出土している。

では、このSI01の遺構埋上や周辺遺物包含層から出土したグリーンタフの玉未製品や石材について記す。第11図は調査区の出土地点にこだわらず、卡作関連遺物としてグリーンタフを掲載したものである。1は溝SD04の底部から出土した管玉未製品で、唯一遺構面直上から出土した遺物といえる。長さ1.6cm、断面0.5×0.6cm、重さ0.6gを測り、片側から錐で穿孔しようとした痕跡が残っている。2はSI01の屋外の溝SD01から出土した管玉未製品である。長さ2.8cm、断面0.5×0.55cm、重さ1.03gを測り、穿孔の痕跡はみられない。3は竪穴建物SI01の西側の灰色粘質土から出土したものである。片側が折れおり残存長1.3cm、断面0.6×0.55cm、0.47gを測る。穿孔の痕跡はみられない。4は表裏品である。荒削で長方体を作り出した段階のもので、長さ2.4cm、断面1.1×1.1cm、重さ3.27gを測る。5は東側遺構検出面から出土した荒削初期のもので、長さ3.2cm、断面1×1.1cm、重さ3.47gを測る。6は竪穴建物SI01の溝sd01よりやや内側のピットから出土したもので、縦3.3cm×横3.7



第11図 SI01遺構面と周辺出土のグリーンタフ製管玉ほか実測図

cm×厚さ1.5cm、重さ26.91gを測る。板材に加工しようとしたものであろうか。7、8は溝sd01から出土したものである。原石壳割段階に出土したものであろう。9も溝sd01から出土したもので、縦7.4cm×横3.4cm×厚さ0.9cm、重さ20.02gを測る。板材に加工しようとしたものであろうか。10は調査区東側の遺構検出面から出土したもので、縦6.5cm×横5cm×厚さ1.6cm、重さ52.83gを測る。加工の痕跡はあまり見られないが板材を意識しているかもしれない。

グリーンタフはSI01を中心分していたことから、SI01内もしくはその周辺でグリーンタフを用いた管玉製作がおこなわれていたものと思われる。グリーンタフの玉作といえば擦り切り技法が一般的であるが、ここでは擦り切り痕が残る石材は全く出土していない。第11図4の出土から、荒削で直方体加工の段階を経て製品を作り出す技法が用いられていた可能性が高いが、調査範囲が狭いため断定はできない。

そのほかの石器としては、敲石、砥石等の大きめのものがある。第28図はSI01を中心に、全調査区から出土したものを掲載したもので、1は溝sd01内から出土したものである。

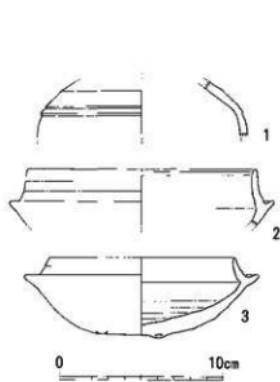
攪乱状況

SI01には面的な攪乱層が見られるほか、SI01内部とその周辺には後世に掘られたビットも多く混じっていることが想定される。西南から北にかけて面的に掘られた攪乱層からは、古墳時代後期の土師器や須恵器を中心とする土器、時期幅の広い石器等が出土した。

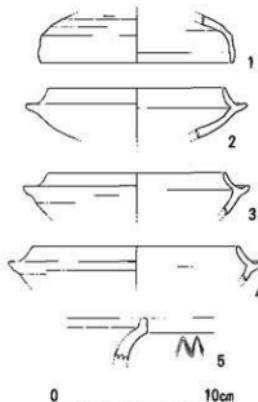
攪乱部からの出土遺物

土師器は風化が著しく取り上げ不可能であったが、須恵器は第12図のとおりである。1は蓋で、天井と口唇部分を欠損する小破片で法量は不明である。2は壺で、復原口径14cm、復原受部径16cmを測り、立ち上がりが垂直方向に高い。6世紀前半頃のものであろうか。復原径がやや大きすぎるかもしれない。3も壺で、比較的の残存状況が良く口径11.2cm、受け部径14.3cm、器高4.8cmを測る。底部外面には火ぶくれがあり、ヘラ記号「×」が描かれている。時期は6世紀後半であろう。

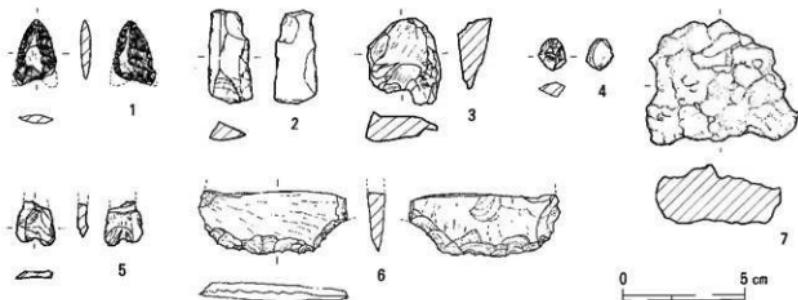
そのほか、多数の石器類および鉄滓1点も出土した。第14図1は黒曜石製の鎌である。四基式で長



第12図 SI01攪乱部出土土器実測図



第13図 SI01西方の灰色粘質土出土土器実測図

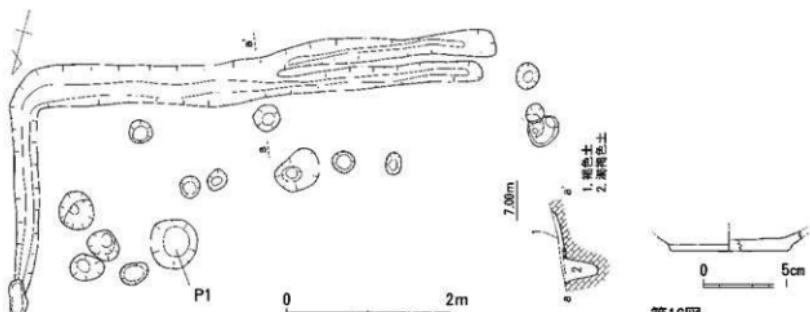


第14図 遺物包含層出土石器・鉄滓実測図

さ2.8cm、最大幅1.6cm、最大厚0.4cm、重さ1.49gを測る。2は卡髓製の剥片である。細かい調整は見られないが、2辺の断面が鋭いので使用には十分耐えうるであろう。縦4.3cm、最大幅1.7cm、最大厚0.7cm、重さ4.61gを測る。3は亦瑪瑙の剥片で、縦3.55cm、最大幅2.9cm、最大厚1.35cm、重さ13.73gを測る。4は水晶の卡未製品であろう。法量は1.1×1.3cm、最大厚0.8cm、重さ0.99gを測る。5は半透明な瑪瑙の剥片で、二次的な欠損が見られる。縦1.8cm、最大幅1.55cm、最大厚0.4cm、重さ1.21gを測る。6は安山岩製のスクレイバーで上部を欠損している。刃部は両面からの丁寧な押圧削離によって作りだされている。残存長6.1cm、残存幅2.6cm、最大厚0.7cm、重さ14.89gを測る。7は鉄滓で、6.2cm×5cm、厚さ2.3cm、重さ92.34gを測る。

② 壊穴建物S101の西に隣接する灰色粘質土層

図面では示していないが、S101の西に隣接した場所には湿地系の灰色粘質土の層があった。層中からは第13図に見られるような遺物が出土した。1～4は古墳時代後期の須恵器小片である。1は蓋で復原口径11.5cm、2は壺で復原口径10.5cm、復原受部径13.4cm、3は壺で復原口径10.5cm、復原受部径13.5cm、4は壺で復原口径12.3cm、復原受部径15.3cmを測る。5は瓦質土器の壺小片である。頸



第15図 加工段1遺構実測図

第16図
P1埋土出土土器実測図

部から反り気味に立ち上がり、口縁端部1cm程度は角度が変わって垂直方向に立ち上がるもので、頸部外側にはハケ状工具で波状文が描かれている。全体がどのような器形をしているもののか類例を知らない。そのほか巨大な敲石状の石器（第28図）や常滑系の壺の小破片も出土している。中世以降の堆積土層と判断する。

③ 加工段01（第15図）

遺構

S101の南に位置する。

斜面の高い方、南側をカットして平坦面を造り出している。平坦面の規模は東西6m、南北3mを測る。平坦面の東側と西側には、状に溝が掘られており、溝の幅は20~30cm、深さは3cm前後と浅く、炭を多く含む褐色土で埋まっていた。西側半分はなぜか二股に分かれている。

ピットは多く検出したが、その埋上中に中世土器を包含するものもあり、同時期のものばかりではないことがわかった。掘立柱建物の復原はできなかった。

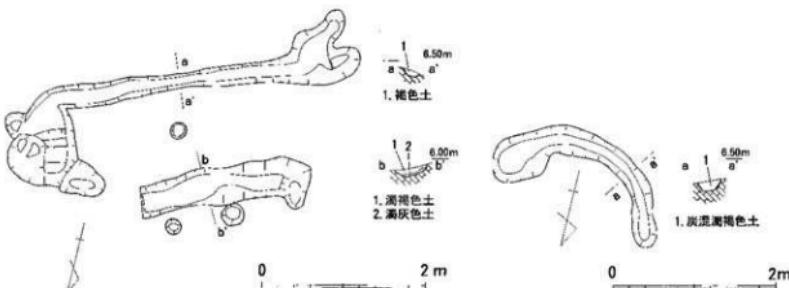
遺物

溝の底部直上から須恵器の蓋または坏の破片が出土した。図面化することはできなかったが、外面には丁寧な回転ヘラケズリが施され、やや扁平に作られていることから6世紀後半頃のものと推察される。

ピットP1からは第16図に示した土師質土器の底部が出上した。復原底径は7cmを測る。底部の調整は風化のため不明である。

④ 溝状遺構 SD01（第17図）

長さ2.1m、幅20cm前後で、両端が広がっている。埋土は褐色土で小炭や赤土器または土師器の小破片を含んでいたが取り上げることは不可能であった。後記する溝SD02と1m離れて平行に掘られているが、2本の溝は周囲の遺構からは単独に存在しており、まとまった遺物も出土しておらず、その性格は不明である。



第17図 SD01・SD02遺構検出状況図

第18図 SD03遺構実測図

⑥ 溝状遺構 SD02 (第17図)

長さ2.15m、幅50cmで、埋土は下層が濁灰色土、上層が濁褐色土である。両層とも小炭や弥生土器または土師器の微小破片を含んでいたが、取り上げることはできなかった。前記したとおり、性格は不明である。

⑦ 溝状遺構 SD03 (第18図)

調査区では最も西側に位置している。長さは2.6mで弧状に掘られており、深さは6~10cmを測る。埋土は炭混じりの濁褐色土1層である。弥生土器または土師器の微小破片を含んでいたが取り上げることはできなかった。溝の周囲には小さなビットが散在していたが、何ら秩序を見出すことはできなかった。この遺構もSD01、02と同様、性格は不明である。

⑦ 自然流路 (第19図)

SD01、02とSD03の間において、標高が高い南方から北方に下がる自然流路の痕跡を検出した。自然流路であるから幅や深さは一定していないが、埋土中には小さな炭片がところどころに入っていた。上層の微小破片も出土したが取り上げは不可能であった。

自然流路の北端付近は平底プランではやや広がっており、実際に掘り始めると深さがあつて溺水の勢いが尋常ではなかったので完掘することは断念した。

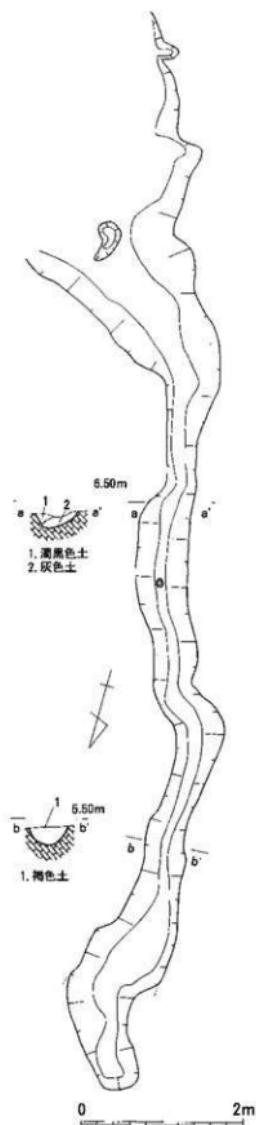
⑧ 溝状遺構 SD04 (第20図)

東西方向に掘られた溝である。ほとんど耕作上直下で平面プランが検出されたため、いつの時代にか開墾関連の土木工事を受けて削平され、上部を尖っているかもしれない。残存長約13.9m、上端幅1m前後、深さ5~10cmを測る。断面は幅広の浅いU字状を呈し、埋土は淡褐色砂質土1層であった。遺物は溝内からもその周辺からも出土しなかった。

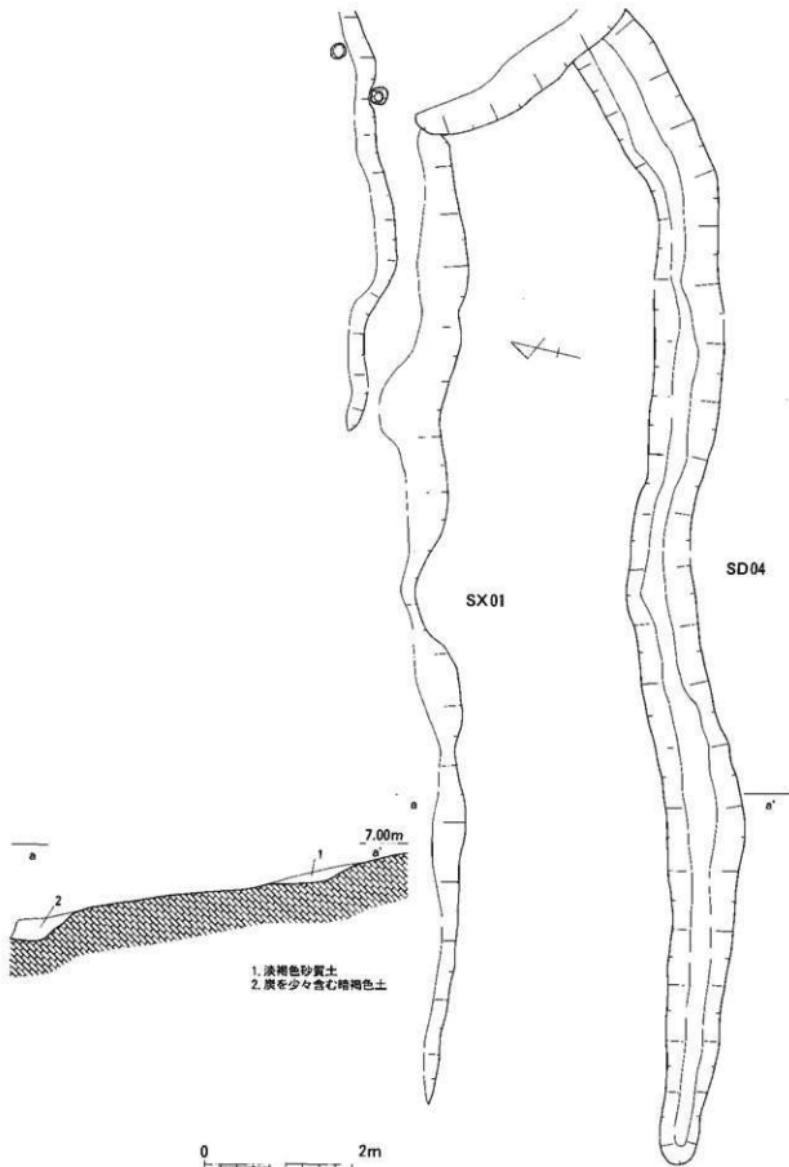
ところで、SD04をここでは溝状遺構として扱っているが、等高線に沿った長い浅い溝は排水施設とは考えられないで、道であった可能性が高い。時期は不明である。

⑨ 段状遺構 SX01 (第20図)

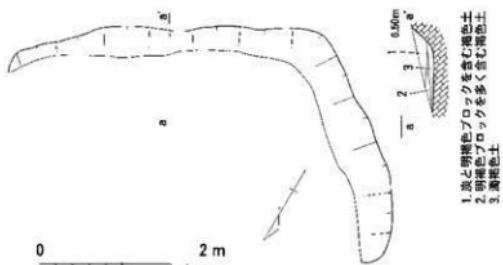
調査区中央部の北寄りで、約12mにわたって地山を垂直に切り落とし、段状遺構が造られていた。一部畦を残してセクションを観察したところ、段の下は炭を少々含む暗褐色土層1層のみであった。



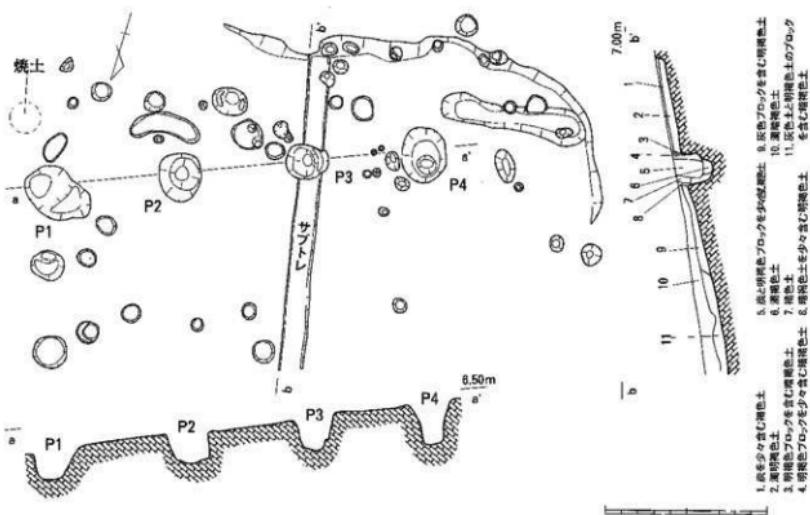
第19図 自然流路実測図



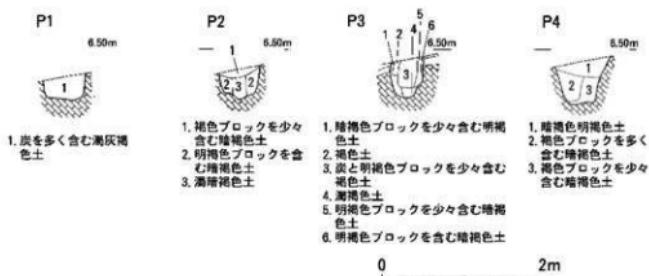
第20図 溝状遺構 SD04・段状遺構 SX01実測図



第21図 加工段02遺構実測図



第22図 SX02遺構実測図



第23図 SX02のピット土層断面図

完掘すると常に湧水があふれ出してきたが、この段が造られた時点ではまだ水位が低かったのであろう。

埋上中からは須恵器の小片が1点出土したが、その他には全く出土していないので造構の時期決定遺物と考えるには心もとない。時期不明、性格不明の造構である。

⑩ 加工段02（第21図）

溝状造構SD04の東端に、南側と西側の地山を削って平坦面が作り出されている。平坦面の規模は東西1m×南北2.7mで、床面からも周囲からもピットは全く検出されなかった。堆積状況は下層から濁褐色土、明褐色ブロックが多く含む褐色土、炭と明褐色ブロックを含む褐色土となっていた。最下層は若干有機質を含んだような堆積土であったが、床面付近に炭は見られず遺物も出土しなかったことから、居住関係の造構ではないと思われる。

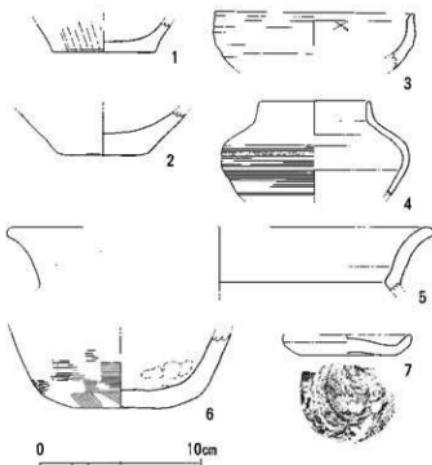
⑪ 性格不明の造構 SX02（第22図）

調査区東端に位置している。南側の標高が高い方の地山を約10cm前後切り落とした段状造構であるが、平面形は非常に不整形である。この段状の地形は平坦面を作り出そうとしたものではないようで、東端は中途半端に途切れ、その内側の造構面にはかなりの傾斜がみられた。

埋土は下層から濁褐色土、炭を少々含む褐色土の2層で、遺物は上層からは微小片が若干出土した。下層および造構面からは出土していない。

遺構

東区東端にはたくさんのピットが散在していたが、中に大きめのピットが4穴、等間隔に1列ならんでいた。4穴の断面を観察すると明らかに柱穴の様相を呈しており（第23図）、各々の芯々距離は



第24図 SX02造構面出土土器実測図

およそ1.6mを測る。ただし、このピット列に対応する柱穴列が無く、掘立柱建物を復原することはできない。かつて北側の低い方に盛土をして平坦面を造成していたのかもしれないが、今回の調査ではその痕跡を見つけることができなかった。このピット列はSX02の埋土上面から掘られており、P1についてはSX02の範囲からは外れていた。

埴山直上からは、十師質土器の皿（第24図7）を伴う炭と焼土を検出したほか、弥生土器、須恵器、土師器とともに中世土器の破片が出上した。したがって、この柱穴列は中世以降のものと判断する。

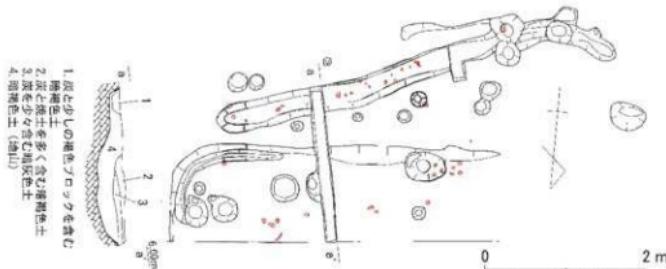
遺物

第24図の1は弥生土器の底部で、復原底径6.3cmを測り、外面にはヘラミガキ調整が観察される。2も弥生土器底部で、復原底径5.4cmを測る。3は須恵器の壺で、復原口径12cmを測る。内面にはっきりしない「×」印のヘラ記号状のものが見える。4は須恵器の短頸壺で、復原口径6.6cm、復原肩部最大径11.4cmを測る。5は十師器の甕で、復原口径26cmを測る。6は器種不明であるが、中世の十師質土器の底部である。体部も底部も外面はハケメ調整が施されている。7は土師質土器の皿で、ほぼ完形が残っていた。口径7.8cm、底径5.7cm、器高1.2cmを測り、底部外面には回転糸切りの痕跡が残っている。そのほかに、包含層中から土師質の擂鉢片が出土した。この軟質な擂鉢片は調査区内から3点出土しており（第30図）、うち1点は調査区中央付近のピット埋土から出土している。

⑫ 满状遺構 SD05（第25図）

遺構

加工段02の東端あたりから始まり、東西方向に長さ5m、上端幅35cm、下端幅20cm前後を測る。堅穴建物02を保護する外部排水溝にしては東側の長さが足らず、性格は不明である。埋土は炭と褐色ブ



第25図 SD05・SI02の遺物出土状況及び遺構実測図



第26図 SD05周辺出土土器実測図・遺物包含層出土土器実測図

ロックを少々含む暗褐色土、1層であった。

遺物

埋上中には上師器の微小片を多く包含していたが、小さい上に風化が進んでいたため人半が取り上げ不可能であった。第26図1は土師器の小型丸底壺で器壁が厚く、外面には赤色顔料が遺残している。2は土師器の高壺脚部である。小型で裾部内面の屈曲が著しい。古墳時代中期の遺物と考えていいだろう。

⑬ 積穴建物 S I 02 (第25図)

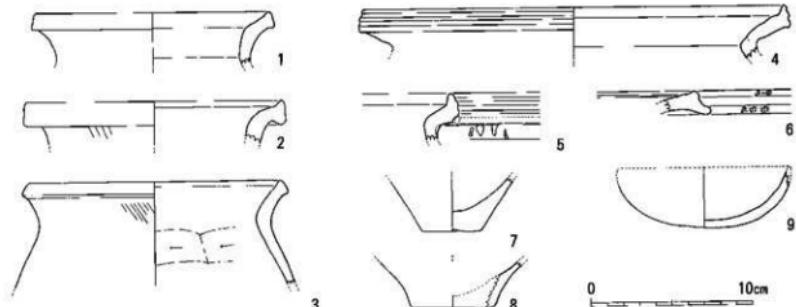
遺構の北側がはとんど調査区外にあり、西側は造構検出以前に溜枠を掘って造構を失っているため、はっきり積穴建物と断言できる状況ではないが、とりあえず積穴建物として取り扱うことにする。

造構検出時の状況では、地山が約10cm掘り下げられて平坦面が造り出されていた。平面形は角丸方形で、規模は前記したような理由で不明である。東南角には上端幅10cm前後の浅い溝が掘られているが、企間を巡るものではない。ピットは床面が狭いわりには多く検出されたが、建物を復原できるような配列を見つけることはできなかった。

造構埋土は下層から炭を少々含む暗褐色土、炭と焼土を多く含む暗褐色土となっている。平面プラン検出時には真っ赤な焼土の広がりを見て焼失建物跡かと思われたが、焼や床面自体は焼けていなかつたため、近くの焼失建物等の焼土や炭の捨場とされていたのかもしれない。

上師器の小片が若干出土したが、風化が著しく取り上げることはできなかった。器種も判断できなかつたので時期は不明である。やや方位に違和感を感じるが、溝SD05を関連施設と考えるなら古墳時代中期ということになる。

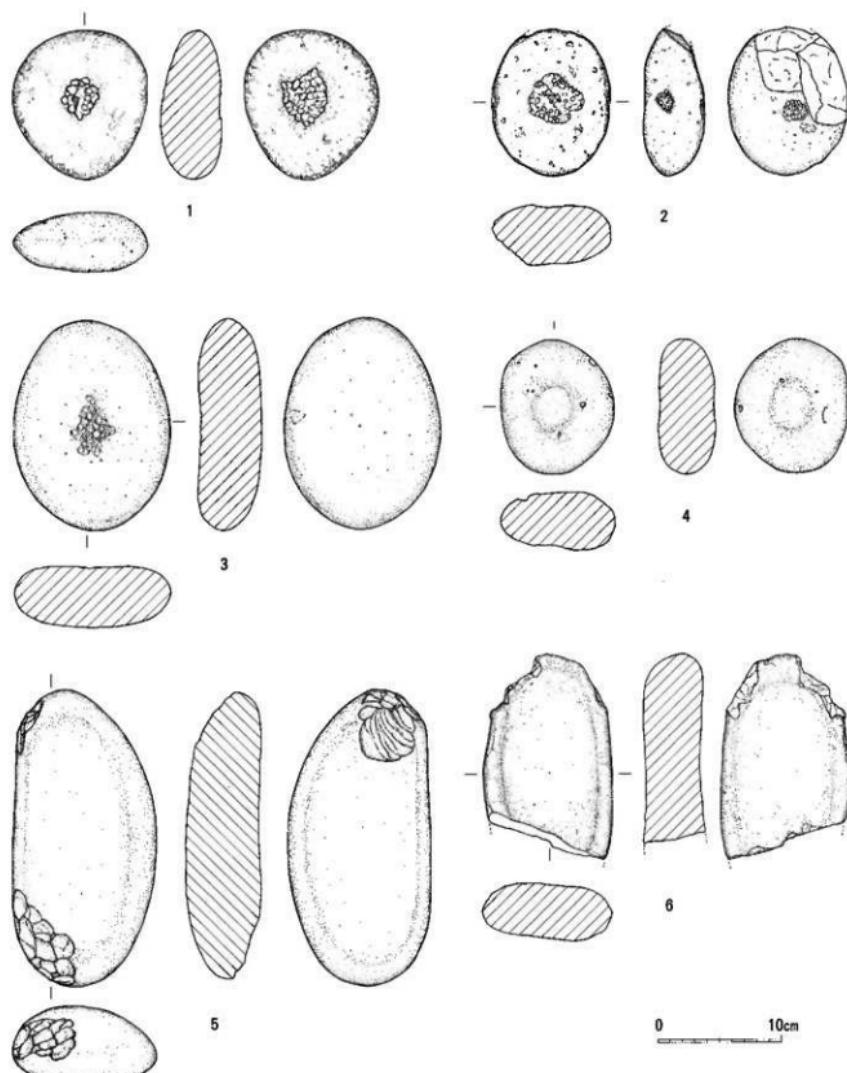
現在では湧水が著しく、半日ポンプを止めると隣接する溜枠が満水になるような状況であったが、S I 02が造られた時代は地下水位が低かったのであろう。



第27図 造構に伴わない土器実測図

⑭ 遺物包含層出土の遺物について

第27図は遺物包含層出土の土器である。前記したとおり、古代の厚い遺物包含層が残っていたのは調査区西側のみだったので、すべてその付近の土器である。風化が著しく、いずれも表面が剥離した



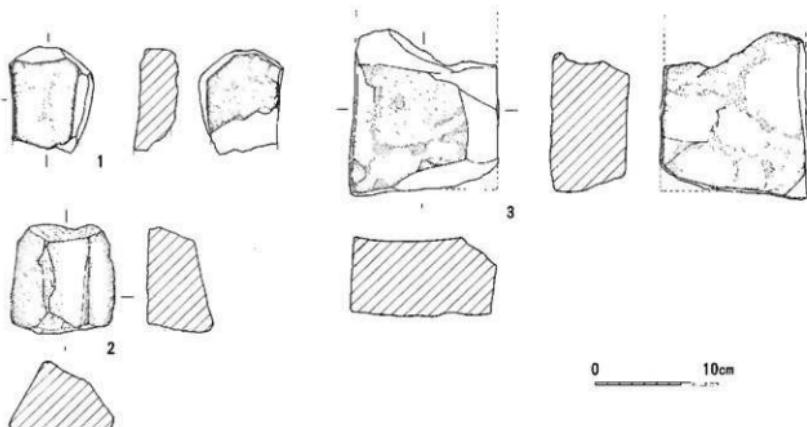
第28図 石器実測図（敲石類）

小片ばかりである。時期的には、弥生時代中期末から古墳時代後期の須恵器までが存在し、弥生時代後期の土器片の比率が高かった。

1から5は甕の口縁部で、1は復原口径14.5cm、2は復原口径15.8cm、3は復原口径16.3cmを測り、いずれも口縁端部はフラットである。風化が著しいが、2と3の頸部外面にはハケメが残存している。4も甕の口縁部で、復原口径26.1cmを測り、口縁端部には2条の凹線が施されている。5も甕の頸部から口縁の小片で、頸部には指頭圧痕文帯が廻らされている。6は壺の口縁端部で、先端は内傾するフラット面に凹線を施して刻み目を入れている。7、8は器種不明の底部で、7は復原底径3.6cm、8は復原底径5cmを測る。9は土師器の椀で、風化が著しく口縁端部と表裏の器面を失っているが、復原口径10.8cm、復原器高3.8cmを測る。

第28図は敲石系の石器である。1は堅穴建物SI01の溝sd01から出土したものであるが、他は遺構に伴わないものである。

1は、滑らかな両面の中央部に使用痕が残る典型的な敲石である。平面形は若干オムスピのようで、縦12.3cm、横10.8cm、厚さ5cm、重さ700gを測る。2は両面中央部と両側面に使用痕が残るが、大きく欠損しており、縦12.1cm、横9.7cm、厚さ5.1cm、残存部の重さ820gを測る。3は、非常に滑らかな石材を利用したやや大きめの敲石である。使用痕は片面の中央部にのみ残っており、縦17.2cm、横12.6cm、厚さ4.9cm、重さ1840gを測る。4は、両面中央部に使用痕が残っている。1～3の使用痕がゴツゴツしているのに対し、この使用痕は滑らかなくぼみ状を呈している。縦11.0cm、横9.3cm、厚さ4.7cm、重さ880gを測る。5はいわゆる敲石ではないが、何かを敲打する用途に使用した石器であろう。平面形は大きな長楕円で、両端部に何か硬いものを敲いたような使用痕が残っている。縦24.3cm、横11.6cm、厚さ6.1cm、重さ2580gを測る、非常に重たいものである。6も5に似たような用途の石器と思われるが、表裏面とも中央部にかけて若干くぼんでいることから、簡易石皿のような用



第29図 石器実測図（砥石）

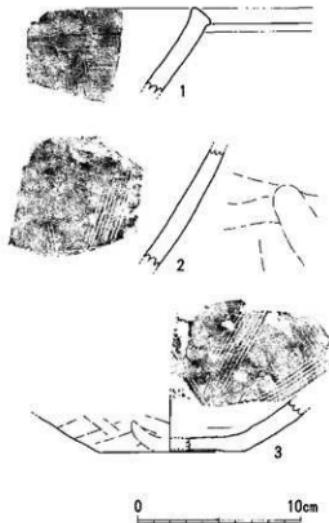
途もあったかもしれない。下部は欠損しているが、残存している方の端部には硬いものを敲打したような使用痕が残っている。残存法量は、縦16.8cm、横10.6cm、厚さ5cm、重さ1410gを測る。

第29図は砥石である。

1は、軟質の石材を使用した砥面が非常に滑らかな仕上げ用の砥石と思われる。表裏両面と1側面が使い込まれているほか、他の面も軽く使用した痕跡が残っている。欠損品であるが、縦8.5cm、横6.9cm、厚さ3.8cm、重さ268.3gを測る。2は目の粗い砥石で、3面に使用痕が見られる。欠損品であるが、縦8.9cm、横8.4cm、高さ5.7cm、重さ507.6gを測る。3も目の粗い大き目の砥石で、2面に使用痕が見られる。欠損品であるが、縦13.6cm、横12cm、厚さ6.2cm、重さ gを測る。

第30図は、出雲地方中世特有の在地系擂鉢で、出雲地方でも出土例はあまり多くない。いずれも上節質で表面が粉っぽく、これで山芋を擂ったら、明茶色のとろろが出来そうである。本当に擂鉢として利用されたものかどうか少々疑問が残る。

1は口縁部である。器底調整はヨコナデで、内面の擂り目は細くて浅い。2は体部で、外面は雜な不定方向のナデつけ、内面は風化のため調整不明であるが、8条1単位の擂り目がある。3は底部で、復原底径9cmを測る。体部外面は不定方向のナデつけ、底部外面は無調整、内面の調整は不明であるが、8条1単位の擂り目が放射状に施されている。



第30図 在地系擂鉢実測図

⑯ 小結

調査区内での最も古い遺構としては、弥生時代後期の円形竪穴建物 SI 01を検出した。床面は後世に削られて傾斜しており、遺構の残存状況は非常に悪かった。わずかに出土したグリーンタフの玉未製品から、グリーンタフを材料として玉作をおこなっていたことがわかった。その製造方法については擦り切り技法の痕跡をとどめる石材が出土していないことから、現時点では敲打による柱状過程を経て管玉に成形していたものと解釈したい。この遺跡の北方約3.5km地点にある松江市鹿島町御津には、崖面に幅5mの帯状のグリーンタフの岩脈が走っているので、原石採取地もそう遠くはない。非効率的で量産向きではないが、原石を贅沢に使用した製作技法である。そのほか、遺物包含層中から水晶の玉未製品や剥片が多く出土している。水晶を材料とした玉作をおこなっていた可能性も考えられる。

隅丸方形竪穴建物 SI 02も検出したが、形状をとどめた遺物が出土していないため時期は不明である。すぐ近くの溝から古墳時代中期の遺物が出土したことから、その頃の遺構である可能性が高い。

古墳時代後期の遺跡としては加工段01を検出した。これも残存状況が非常に悪く、この時代にもここに人々の営みがあったという事を伝えるにすぎなかった。

中世の遺構は、性格不明の遺構 SX 02があった。明らかに柱穴と思えるピットが等間隔に並んでいたが、対応するピット列が無く、建物を復原することはできなかった。

最後にこの鶴瀧山遺跡においては、古代の遺構に混じって中世の遺物を包含するピットや上層が多く存在したことを特記しておきたい。このあたりは宍道湖と日本海を結ぶ交通の要衝であり、中世においては人勝間山城のほか池平城や芦山城、海老山城等がひしめき合っていた。また、古代から中世にかけて勢力を誇った佐太神社も鎮座している。大きな施設があれば、そこに従事する人間の数も多いはずである。それだけに、中世の遺跡が数多く埋もれている可能性は非常に高い。鶴瀧山遺跡周辺もその例外ではないであろう。

(3) 大勝間山城跡

第一次調査は平成17年11月7日から平成12月9日までの17日間おこなった。ただし、その期間に立木伐採について地権者の承諾が得られなかった場所については、第二次調査として平成19年2月1日から2月8日までの6日間おこなった。

勝間山は独立丘陵で、大勝間山城は山城というよりはむしろ平山城といえる。現在ではこの勝間山の東側半分近くが削平され、端部のオーバーハングした生々しい赤土の崖は現在もそのまま残されている。かつての勝間山がどれくらいの面積をしめていたのか、古い航空写真や地元古老人の話をもとに勝間山の範囲復原を試みた図面が作成されている（第31図）。それを参考にするなら、勝間山の約半分近くが失われているようである。

調査地は、現存する勝間山山頂から東へ一段下がった緩斜面とそこから1m下がった帯曲輪状の平坦面、そして佐陀川方向に張り出した曲輪状平坦面から構成されている（第32図）。いかにも人工的な山城らしい地形である。ただし、地元の人の話によればこのあたりは戦中戦後に開墾されて芋畑が作られていたらしく、山城が機能を失った後に新しい時代の地形改変がおこなわれている可能性も否定できない。

第一次調査は、まず曲輪状地形に山城普請工事の痕跡が見られるかどうかを観察するため、段状地形にトレントA-A'を設定し、佐陀川方面に張り出した平坦地についてもトレントB-B'を設定して層序の観察をおこなった。また、遺構や遺物の有無を確かめるべく、調査区上段平坦面および下段平坦面については面的な調査を実施した（第33図）。第二次調査では、トレントA-A'の東側の上下平坦面についての面的な調査を実施した。

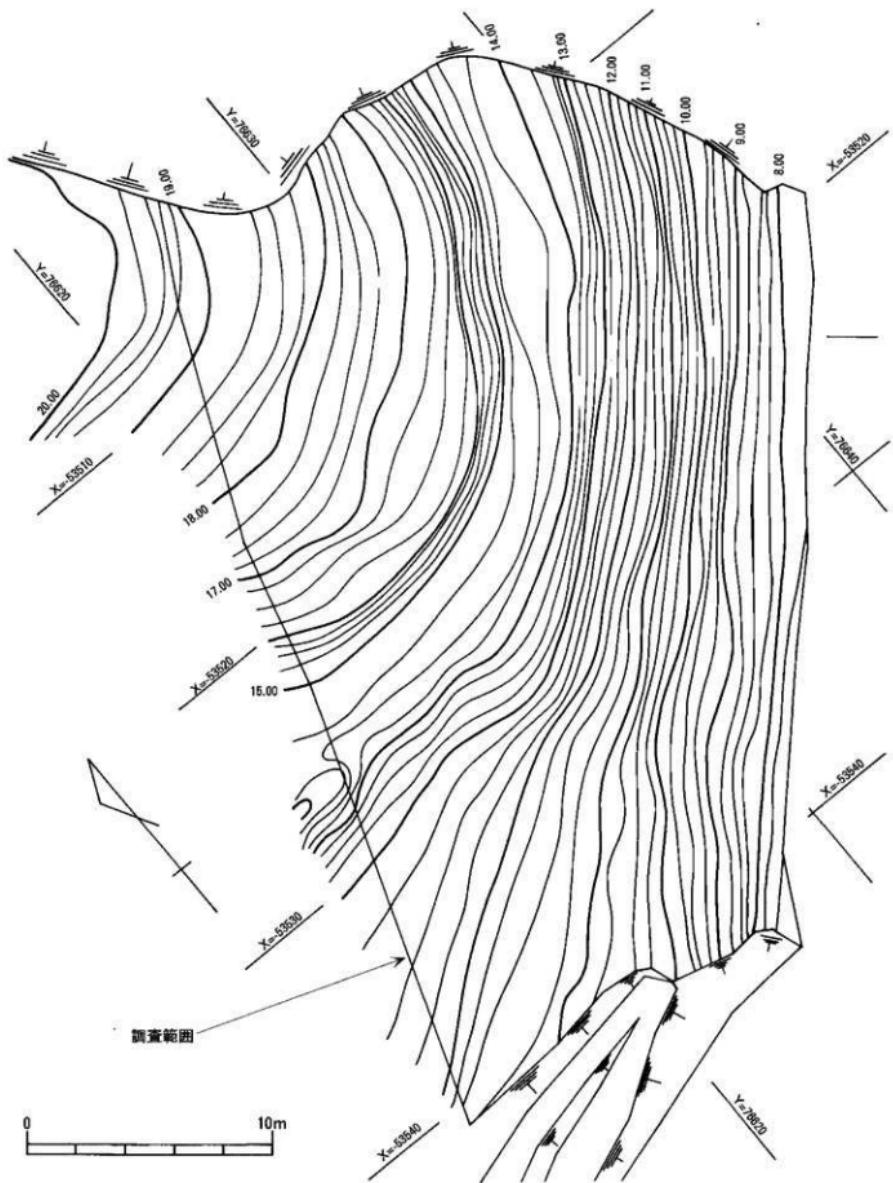
① トレントA-A'（第34図）

上段緩斜面の西端最高部付近は浅い表土直下が地山となっており、東端肩部には人為的な盛土層が観察された。最下層の淡褐色土（8層）はやわらかい地山土のようであったが、それ以上の層（2、6、7層）になると小块を多く包含した層になっており、芋畑耕作時期にかきまわされたものかもしれない。



第31図 大勝間山城跡復元図

（石井悠「鹿島町内の中世城郭」『研究集録』八束郡鹿島町立鹿島中学校（1992年3月）より転載・加筆）



第32図 大勝間山城跡調査範囲及び調査前地形測量図

れない。遺物は、最下層（8層）から陶磁器片1点が出土した。その遺物が示す時期は少なくとも明治以降の新しいものであった。

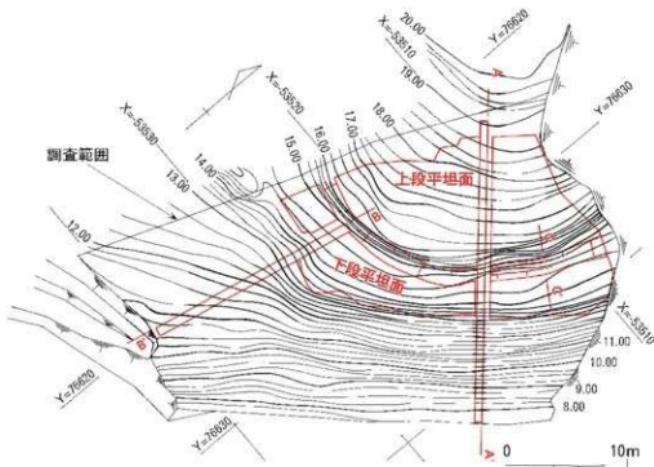
下段の帶曲輪状地形についても人為的な盛土層を確認した。9層は濁灰褐色土で旧表土のような印象を受けた。2層は濁褐色土で小炭を含んでサクサクと跳びおりが良く、いかにも耕作土として作りあげられた土のようであった。ここで注目したいことは、この段の山手側の地山が角度をもってカットされていたことである。地山を削って急斜面に幅わずか3mの平坦面を造りだし、その平坦面は等高線に沿って南北に長く伸びている。この平坦面から遺物は出土していない。地山がカットされた時期は不明である。

② レンチB-B'（第35図）

レンチ上半部の地山を検出すると、なだらかであったり地山の石がごつごつと飛び出していたり、人工的な造作を受けた痕跡はまったく認められなかった。

これに対しレンチ下半部は、大量の有機質を含有した黒灰色粘質土、湿地系の上が何層にも盛土された様子が観察された。ところどころに山土と思われる黄褐色系の土（14、21層など）がサンドイッチされているのは、軟質泥土の盛土に安定感をもたらせるためであろうか。安全への配慮から調査区南端の岸までは掘らなかったが、レンチ南端ぎりぎりの地点では地山がさらに垂直にカットされ、そこにも灰色粘質土系の上が厚く盛土されていた。レンチをさらに延長すれば、灰色粘質土の盛土はかなり深くなっていたに違いない。旧表土が除去されており、レンチの範囲内でも地山の垂直カットが2ヶ所見られたことから、地山に整地加工を施して、その後に盛土をおこなったと考えられる。

これはまさに江戸時代の運河、佐陀川開削工事の際の廃土置場である。佐陀川方向に張り出した曲輪状平坦面は山城関連の遺構ではないことが明確となった。

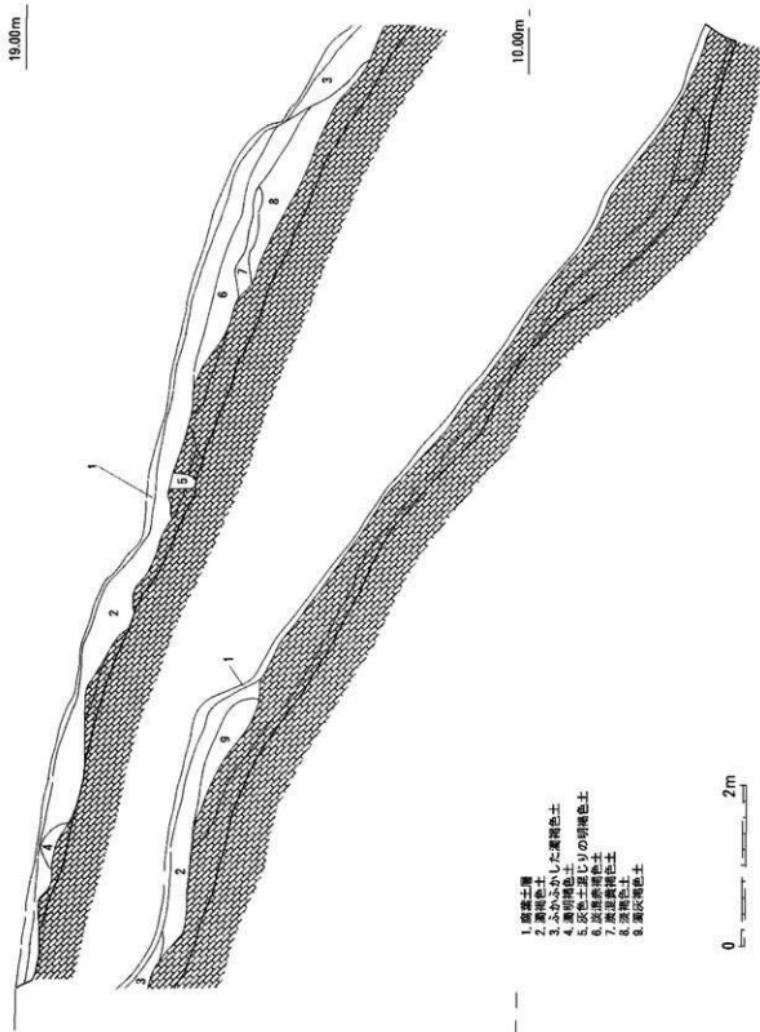


第33図 大勝間山城跡平坦面調査範囲及びトレンチ設定図

③ 上段平坦面

第1、2次調査とも基本的層序はトレンチ調査でわかっていたので、耕作土と思われるサクサクとした土を除去し、地山の検出をおこなった。結果として、山城に伴う遺構は全く検出されなかった。出土遺物は、現代の湯呑茶碗の破片が少々出土したが、中世のものは確認できなかった。

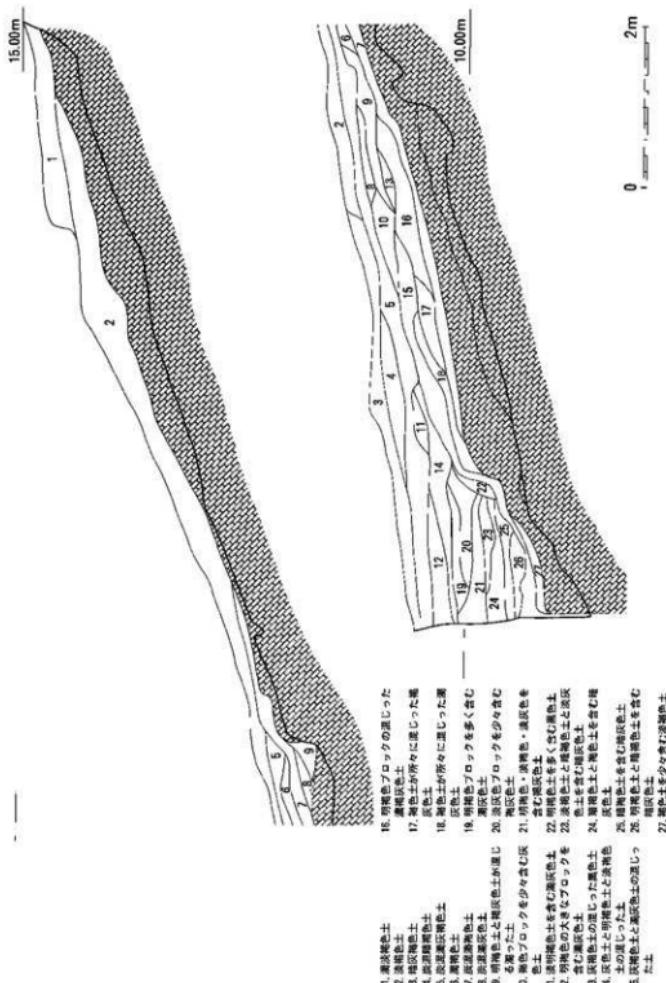
第34図 A-A'セクション実測図



④ 下段平坦面

幅2~3mの帯曲輪状で、ほぼ同じ等高線上に廻っている。かつて芋畑にされていたためか、地山上の土はホクホクと軟らかかった。その耕作土を除去して地山を検出すると、その面は非常にフラットで丁寧な加工が施されていた。ピット等の遺構は存在しなかった。

遺物は、現代の茶碗の破片が出土しただけなので、この地山加工がいつの時代のものなのかは不明である。



⑤ 上段、下段平坦面間の崖

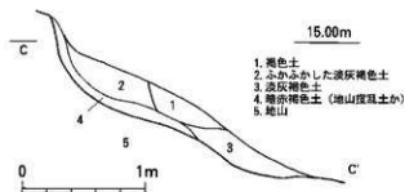
A-A'トレントより西側の、上・下段平坦面間の崖は垂直もしくはオーバーハング状を呈しており下段平坦面の面積を確保しようという意図が感じられたが、東側の崖については比較的緩やかであった。C-C'セクション（第36図）は、表土を除去した後、等高線方向帶状に地山を切った埋土があったため平面化したものである。1～4層は全てやわらかい土質であった。3層から現代のタイルが出土したので、昭和以降の堆積土と判断する。

⑥ 小結

調査区の上方緩斜面と一段下がった帯山輪状平坦面は、いかにも中世の山城造構の地形である。しかし、地元の人から「ここは戦後に開墾されて芋畑が作られていた」という話を聞いたので、すべてを中世の山城に結びつけるのは危険であろうと考える。特に、上段平坦面から帯山輪状平坦面に落ちる崖の、赤土が露出してオーバーハングしている状況、それは数百年もの時を経ている状況ではありえない。芋畑を作る際に本来あった山輪地形を利用、またはそれを一部改変して利用している可能性は確かに考えられるであろう。ただ、この山の北西側を見るとみごとな離段状地形が造り出されて植林がおこなわれている。そんな人の手が入りやすい甲山であるから、あまり安易な考え方をしない方が良いのではないであろうか。トレント調査で盛土や地山加工の痕跡も検出したが、中世の遺構に結びつく可能性を否定することはできないものの、確実に中世の普請と確信できる遺構は無かったと判断する。

ところで、佐陀川方向に張り出した曲輪状平坦面は、江戸時代の佐陀川開削工事にともなう廃土捨場遺構であることがわかった。鶴瀬周辺は軟弱な低湿地であるため、運河の岸は崩壊を繰り返し、大量の泥土を除去しなくてはならない難工事であったと伝えられている。ここでは、標高0m付近の泥上をわざわざ標高10m近いレベルまで運び上げ、厚いところでは2m近くも積み上げて捨てている。廃土捨場の底面を観察すると、旧表土の除去や地山の水平および垂直カットの痕跡が見られた。このことについては、標高の高い場所の堅い地山土を佐陀川まで運んで運河周縁を固め、その跡地を廃土捨場に利用したのではないかとも推察されている。このような廃土捨場遺構は、勝間川から東方に200m離れたバクチ谷の標高約20mのトレント調査でも確認されている。

佐陀川開削工事は、清原太兵衛を中心となって約3年間をかけ、天文8年1月に完成させたものである（第37図）。江戸時代の土木工事であるから文献資料も多く残っているが、開削にあたった人々の並々ならぬ労苦がぎっしりと感じ取れる興味深い遺構である。



第36図 C-C'セクション実測図

⑥ 鹿島町地内の山城（第37図）

松江市鹿島町地内には現在9ヶ所の中世城郭跡が知られている。その分布状況を見ると、2群に大別できるような気がする。

1つは、講武平野線辺の城砦群で、小田山城跡、松尾山城跡、上講武殿山城跡、大石山城跡である。ほとんど文献が残されていないため、城主等の詳細は不明である。講武平野は水田耕作に適していることから、仕入管理にあたった人物の築城によるものと思われるが、尼子氏と毛利氏が争いを始めた時期には機能していなかった可能性が高い。

もう1つは、講武平野線辺の中でも佐陀川流域の城砦群で（中世にはまだ佐陀川は出来ていないか）、海老山城跡、芦山城跡、大勝間山城跡、池平山城跡である。

この場所が重要視された理由として、1つには出雲国二宮である佐太神社が鎮座していたこと、佐陀庄の管理のこと、そして宍道湖と日本海を結ぶ交通の要衝であったことが考えられる。宍道湖から佐太水海に入り、講武平野の西端を通り、恵譽堤を経て日本海へ出るこのルートは水上交通が利用でき、当時としては絶好のルートであったと思われる。

これらの山城については文献が残されており、池平山城のみは古い時期の築城であるが、他の山城は比較的新しく戦国時代末期に機能していたことがわかっている。

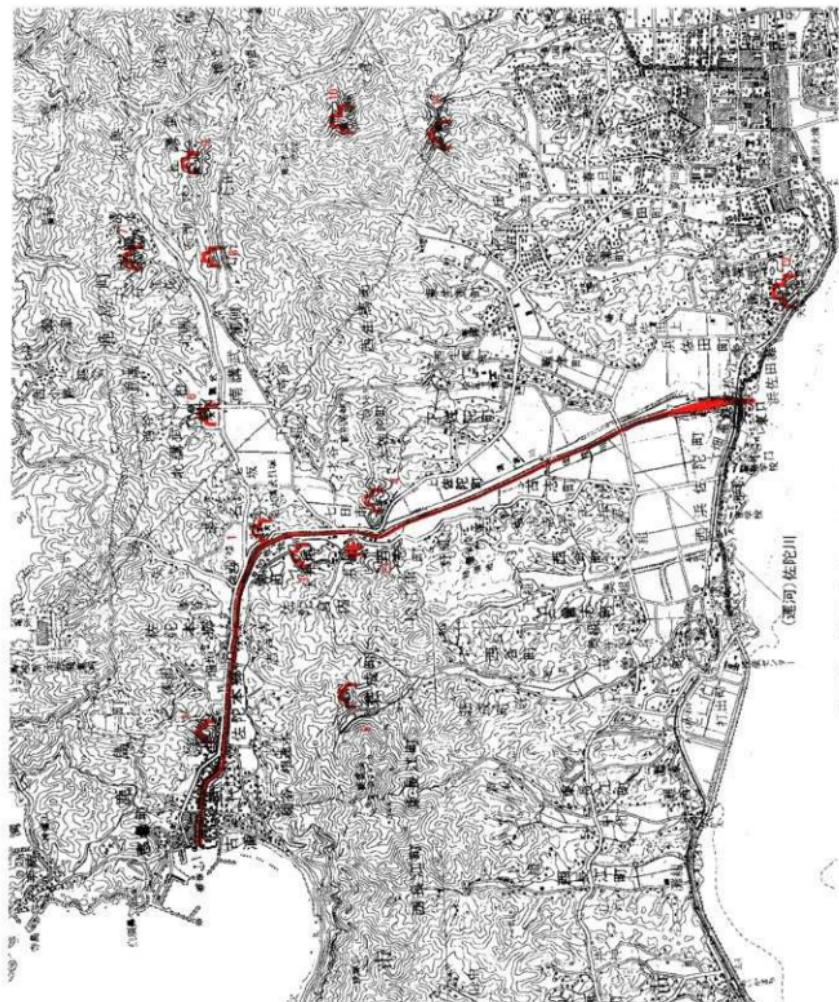
いずれも城主名や、断片的な逸話が現在に伝えられているので、そのことについて少々記しておく。池平山城は『朝山家系図』によれば慶永六年（1339年）に朝山昌時が築城したという。この山城は鹿島町教育委員会が発掘調査を実施しており、その結果によれば、曲輪周辺のビットのいずれにも炭化物が含まれ、中には焼土を含むものもあったという。調査担当者は「ビットに立てられた木杭等が激しく焼かれるような事があったためと考えられる。文献には見えないが、この城をめぐっての戦いがおこなわれたことを示すものであろう。」と解釈している。寶徳二年（1450年）に池平山城主朝山越前守貞昌が芦山城を築いたのは、佐太神社との関係が大きいと思われるが、そのような背景も一因にはあったかもしれない。さらに『朝山家系図』『雲陽誌』によれば、芦山城の朝山氏は海老山城に居城した佐陀庄島根分の地頭仁田馬頭某を滅ぼしている。その後に尼子から地頭職を与えられたのは福領内膳正であり、彼は海老山城を捨てて大勝間山城を築城したという。

今回調査を実施した大勝間山城も、軍記物『雲陽軍火記』にえがかれているので紹介しておく。尼子復興戦時の話である。吉川元春が鳴尾城に本陣を置いた時期の話で、「…然ば佐陀に程近き勝間城には、志道左馬介、中村内蔵大夫を毛利より、被置けるを攻み逆、三刀屋歳人に八百余騎を添て彼に向、合戦手繁く敵味方共に亡命を不顧切戦けるに、三刀屋歳人に極にや、鉄砲に脇腹を討ち抜かれ失せにければ、勝久公無念之憤無止時、追々軍兵を差向、勝間を攻落とさんとし乍ふ由聞へければ、元春より森脇若狭守、益田越中守五百余騎を添て加勢被放けるに、遂に森脇市正、平野嘉兵衛、真木與一衛門等に遭遇、追返しつ戰けり、然るに毛利勢は過半は手負、死人はまた二三十人出来ければ、不叶して引退くを跡より附入追討にしける故、這々鳴尾が果へぞ入にけり、…」とある。ここは、尼子氏が海路から真山城へ兵糧物資を運び込むのに重要な場所であったと思われる。真山城に陣取った尼子軍に対し、毛利氏が大勝間山城を向城として利用し、小競り合いがおこなわれたことは十分に考えられる。

上記した説話にどこまで信憑性があるのかは不明であるが、それらが眞実に近いものであったとすれば、今は穏やかな佐陀の田舎も、中世においてはまさに戦国動乱の一舞台であったといえよう。

第37図 鹿島町を中心とする中世の山城と佐陀川

1. 大勝間山城跡
2. 池平山城跡
3. 貞山城跡
4. 海老山城跡
5. 伊貝城跡
6. 小田山城跡
7. 大石尾山城跡
8. 松尾山城跡
9. 上勝武藏山城跡
10. 真山城跡
11. 白鹿城跡
12. 芬隅城跡
13. 佐田神社



第4章 結びにかえて

鹿島中学校の校地拡大および増改築工事にともない、近接する遺跡2ヶ所の発掘調査を実施した。鶴瀬山遺跡では、弥生時代後期の円形竪穴建物のほか、古墳時代の加工段、中世の性格不明のピット列等、幅広い時代の遺構を検出した。また、大勝間山城跡では、山城の明確な遺構は検出できなかつたが、佐陀川開削時の揚上層を確認した。

また、鹿島中学校の南方50mの地点には国指定史跡、佐太講武貝塚があり、中学校南東の丘陵上には鶴瀬山古墳群がある。中学校の敷地自体も大勝間山城を重機で削平して造成された場所であり、中学校の西側を流れている佐陀川は江戸時代に開削された運河である。鹿島中学校周辺は遺跡の過密地域と言っても過言ではない。

調査もほぼ終了した、平成17年11月18日、鹿島中学校の依頼を受けて1年生を対象にした遺跡の見学会をおこなった。生涯学習授業の「1年社会科地域の歴史」である。中学校の敷地になる場所の遺跡だから、是非実施したいと思っていたことである。

当日は教室から解き放たれた開放感か、生徒達はとにかく大騒ぎであった。担任の先生に鎮めてもらって、ひととおり説明すると、みんなの感慨深げな眼差しを感じることができた。遺跡の調査にあたる人間の喜びの1つである。

右頁に、担任の先生からいただいた生徒達のレポート中の『感想や疑問点など』コーナーを一部掲載しておく。その文章の中には「こんな身近な所に歴史があったのか」という新鮮な驚きが満ちている。今回の感動をきっかけとして、生徒達が自ら歴史に触れる機会を求め、故郷の歴史に誇りを持ち、さらには人類全体の歴史にまで興味をいだいてくれたらと願い、筆を置きたい。



○感想や疑問点など

今までしらなかったことがたくさんありました。とくに住居跡にはビックリしたのは、くつした物の中の黒よう石は1僕の家にもあた。住居跡に入った時に土がすごくありました。あと勝間山が校門の所の山だったことをもうどうきました。

(青山 周平さん)

○感想や疑問点など

今日お話を聞いて知っていることもあれば知らないことが多かったです。特に野球場横にたて穴式住居があたりにはびっくりしました。こんな近くに城戸古墳など歴史的なものがたくさんあつたのに驚きました。新しい発見!がたくさんあつたこの時間でした。

(青山 凌さん)

○感想や疑問点など

地元で戦がおこっていたとは思わなかった。
鹿中のきね地内にたて穴住居や、土器、ハセキがある
ということに驚いた。

(井上 忠洋さん)

○感想や疑問点など

こんな重要な所が1万2千年前のものや、2千年前のたて穴住居が
千年以上も前の人たちが残して物が発見されていくびっくりしました。
有名なものはすぐ近くで発見されていました。かっこいいです。

(佐野 香澄さん)

○感想や疑問点など

そこにある山が「昔あたは城たたことそばは」みてしきました。
大勝山城という名前もちゃんとあるんだ「たよると思って、すこ
い」と思いました。野球場みたいにあたてにさか「昔あたはよい時
代の住居」とて初めて矢張りました。

(坪倉 麗奈さん)

遺物観察表(土器)

辨別番号	種別 器種	出土位置	寸法(cm)			形態・文様の特徴	調査	色調	備考
			口径	底径	高さ				
10-1	弥生土器 蓋	S101	(26.0)	8.8	54.0	縁部へ口縁の内側(内)ヨコナデ(一部風化) 既存	(内)灰褐色、明黄褐色 (外)黄褐色、橙色	外側すり付着	
10-2	弥生土器 蓋	S101	(16.8)			口縁端部はフラット(内)風化のため不明 ト	(内)褐色、黄褐色 (外)黒褐色、綠色		
10-3	弥生土器 蓋	S101	(18.8)			口縁端部は1条凹 線	(内)ヘタケズリか風化のため 不明 (外)ヨコナデ	(内)褐灰色 (外)褐褐色	
10-4	弥生土器 蓋	S101	(17.0)			口縁端部は1条凹 線	(内)ヨコナデ(一部風化のため不明) (外)ヨコナデ	(内)灰褐色、灰褐色 (外)黒褐色、灰褐色	
10-5	弥生土器 蓋	S101	(18.9)			口縁端部は1条凹 線	(内)ヨコナデ(一部風化のため不明) (外)ヨコナデ	(内)明褐色、灰褐色 (外)灰褐色、浅黃褐色	外縁の頭部くびれより下にハケメ
10-6	弥生土器 蓋	S101	(21.7)			口縁端部は2条凹 線	(内)ヨコナデ(一部風化のため不明) (外)ヨコナデ	(内)褐褐色 (外)灰褐色	
10-7	弥生土器 (底部)	S101		5.2			(内)風化 (外)	(内)灰白色 (外)黑褐色	
10-8	弥生土器 (底部)	S101		(8.0)			(内)風化 (外)ヘタケ?	(内)灰褐色 (外)黑褐色	
10-9	弥生土器 (底部)	S101		7.2			(内)風化 (外)ナデ	(内)灰褐色 (外)褐色、にぶい黄褐色	
10-10	弥生土器 (底部)	S101		(10.6)			(内)風化 (外)ガキ、ナデ	(内)褐褐色 (外)黑色	
12-1	須恵器 蓋	S101横乱部			6.0×4.0程度残存	6.0×4.0程度残存	(内)回転ナデ (外)回転ナデ、回転ヘタケズ リ	(内)褐色 (外)灰褐色	
12-2	須恵器 环身	S101横乱部	(13.8)	受部残 (16.0)		口部部小片既存	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内)灰白色 (外)灰白色	
12-3	須恵器 环身	S101横乱部	11.3	受部残 14.3	4.8	口縁外面に長さ1.5 cmの他の須恵器が 残存、外面全体に 自然輪がかかる	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内)灰白、灰色 (外)オーリーブ緑、黄褐色	底部へラ記 号「X」あり
13-1	須恵器 环蓋	灰色粘質土	(12.1)			口縁部小片既存	(内)回転ナデ (外)回転ナデケズリ	(内)灰色 (外)暗灰色	
13-2	須恵器 环身	灰色粘質土	10.8	受部残 (13.6)		1/4弱既存	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内)灰色 (外)灰色	
13-3	須恵器 环	灰色粘質土	(10.8)	受部残 (13.8)		小片既存	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内)灰色 (外)灰色	
13-4	須恵器 环身	灰色粘質土	(12.6)	受部残 (15.6)		小片既存	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内)灰色 (外)灰色	
13-5	瓦質十輪 蓋?	灰色粘質土				波状文あり		(内)灰色 (外)灰色	
16	土師質土器 蓋	P-1		(7.2)					(内)にぶい褐色
24-1	弥生土器 (底部)	SX01造痕面 (10cm位上)		(6.0)		小片(底部の劣程 度残存)	(内)ミガキ (外)ナデ	(内)灰褐色 (外)黑褐色、にぶい褐色	
24-2	弥生土器 (底部)	SX01造痕面 (10cm位上)		(5.5)		小片(底部の劣程 度残存)	(内)ナデ (外)ミガキ?	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい褐色	
24-3	須恵器 环	SX01横板面 (10cm位上)		(12.3)		小片既存	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	(内)灰白色 (外)灰色	口縁内面にへ ラ記号「X」
24-4	須恵器 短頭部	SX01東側倒 構築出面		(6.7)		小片既存	(内)回転ナデ (外)回転ナデ、カキメ	(内)灰白色 (外)灰褐色、灰色	
24-5	土師器 七節器	SX01造痕面 (10cm位上)		(26.3)		小片既存	(内)ヨコナデ (外)ヨコナデ	(内)にぶい赤褐色 (外)褐色、にぶい赤褐色	
24-6	土師質土器 (底部)	SX01		(9.7)	(5.7)	底部の劣程度残存	(内)ナデ、指痕丘 (外)ナデ後ハケメ	(内)褐色 (外)橙、黑褐色	内面に指痕丘 底、外面上にナ デ後ハケメ
24-7	土師質土器 環	SX01(炭素 焼土付近) 焼土	7.8	3.9	1.3	1/4既存	(内)ヨコナデ後一定方向への 仕上げ (外)ヨコナデ、底部に余存既	(内)褐色、暗褐色 (外)褐色、にぶい褐色	内面の口縁近 くの一部に粘 土層付着
26-1	土師器 小型丸紋壺	SD05周辺	野柳岸 (5.8)			小片既存	(内)ナデ (外)風化	(内)褐色 (外)褐色	内面上部に指 痕丘既
26-2	土師器 高杯	SD05周辺				脚部の底部に近い 部分のみ劣程度残 存	(内)ナデ (外)	(内)褐色 (外)褐色	括弧約8mmの 円形の通しが 1ヶ所あり

() 内数字は復原値

遺物観察表(土器)

番号	種別 器種	出土位置	寸法(cm)		形態・文様の特徴	調 整		色 調	備考
			口径	底径+器高					
27-1	陶生土器 要	包含層	(14.5)		小片残存 (4)ヘラケズリ(底化のため (内)はっきりしない) (外)ヨコナデ(底化のため (外)はっきりしない)			(内)浅黄褐色 (外)にぼい橙色	
27-2	陶生土器 要	包含層	(15.8)	直径 (14.4)	口縁部小片残存 (内)ナデ? (外)ナデ?			(内)にぼい黄褐色 (外)灰褐色	
27-3	陶生土器 要	包含層	(16.3)		小片残存			(内)淡黄褐色、明褐色 (外)淡黄褐色、明褐色	
27-4	陶生土器 要	包含層	(26.1)		二種類の小片残存 (内)回転ナデ(底化が激しい) (外)回転ナデ(端部に2条の凹 跡がある)			(内)淡黄褐色、灰褐色、明褐色 (外)褐色、浅黃褐色	
27-5	陶生土器 要	包含層			小片残存 (内) (外)			(内)淡黄褐色 (外)淡黄褐色	
27-6	陶生土器 要	包含層			小片残存 (内) (外)			(内)にぼい褐色 (外)にぼい褐色	
27-7	陶生土器 (底部)	包含層	(3.6)		底部均等残存 (内)底化 (外)底化			(内)淡黄褐色 (外)にぼい赤褐色	
27-8	陶生土器 (底部)	包含層	(5.0)		5×4cm程度残存 (内)底化 (外)底化			(内)褐色、淡黄褐色 (外)にぼい赤褐色、褐灰色	
27-9	土器器 械	褐色土	(10.8)					(内)褐色 (外)底化	口縁部を欠く
30-1	上脚質 標本	褐色土			断面が6cm程度 残存	(内)ヨコナデ、下部不定方向 のナデ (外)ヨコナデ、無筋1糸 (内)不定方向のナデつけ (外)8条の筋割目化が詳しい		(内)淡明褐色 (外)淡明褐色	
30-2	上脚質 標本	E 9-50					(内)8条1筋の筋割目状 (外)不定方向のナデつけ、下 部粗調整		
30-3	上脚質 標本	褐色土	(9.0)		断面が約1.5cm (内)不定方向のナデつけ、下 部粗調整			(内)淡明褐色 (外)淡明褐色	

() 内数字は推定値

遺物観察表(石器)

番号	種別 器種	出土位置	寸法(cm)			重量 (g)	石 材	調 整 等		色 調	備 考
			長さ	幅	厚さ						
11-1	管下木製品	S101木面	1.6	0.6	0.6	3.6	グリーンタフ	片面に穿孔の跡あり	輝灰白色		
11-2	管下木製品	SD01	2.8	0.5	0.5	1.03	グリーンタフ	断面円形	輝灰白色		
11-3	管下木製品	灰白色木質土層	1.3	0.55	0.4	0.47	グリーンタフ	断面凸形	少數の無底孔 (内)海灰白色		
11-4	管下木製品		2.4	1.1	1.0	8.27	グリーンタフ	柱状段階	オリーブ灰褐色		
11-5	石材	SX01滑槽面	3.2	1.1	1.1	3.47	グリーンタフ		暗灰～にぼい褐色、白色		
11-6	石材	P-19	3.3	3.7	1.5	26.91	グリーンタフ	柱状の前段階か?	灰白色		
11-7	石材	SD01	4.8	2.4	2.7	24.66	グリーンタフ		オリーブ灰白色		
11-8	石材	SD01	6.1	2.75	1.55	25.50	グリーンタフ		灰白色		
11-9	石材	SD01	7.4	3.4	0.9	23.02	グリーンタフ		灰白～淡黄褐色		
11-10	石材	SX01	6.5	5.0	1.6	52.83	グリーンタフ		明るい灰白色		
14-1	鉋	SX01	2.8	1.6	0.4	1.49	黒蝶石				
14-2	剥片	SD02	4.3	1.7	3.7	4.61	玉髓		褐～灰褐色		
14-3	丸片	S101撲乱部	3.55	2.9	1.35	18.73	赤瑪瑙		半透明、明赤褐色		
14-4	玉木製品	褐色土	1.3	1.1	0.8	0.99	水晶		半透明		
14-5	剥片	褐色土	1.8	1.65	0.4	1.21	瑪瑙		白、半透明		
14-6	スクリーパー	包含層	6.1	2.6	0.7	14.89	サスカイト	両サイドから剥片剥離			
14-7	鉋片	S101撲乱部	6.2	5.3	2.3	92.34			黒褐～褐色		
28-1	礫石	勾玉層	12.3	10.8	5.0	700					表面に使用痕あり
28-2	礫石	SX01	12.1	9.7	6.1	820			灰褐色		
28-3	礫石	凹凸層	17.2	12.6	4.9	1,840					表面に使用痕あり
28-4	礫石	SX01	11.0	9.3	4.7	880					
28-5	敲打石器	灰色砂質土	21.8	11.8	6.1	2,580			浅黄色、黄褐色		
28-6	敲打石器	SX01	16.8	10.6	5.3	1,410	刮削痕残存		鉄灰色、灰褐色		
29-1	圓石	EP-5	8.5	6.9	3.8	268.36			にぼい黄褐色	仕上部石	
29-2	圓石	P-31	8.9	8.4	5.7	507.68			淡黄褐色	粗砾石	
29-3	砾石	S101撲乱部	13.6	12.0	6.2	1,470					

写 真 図 版

写真図版目次

- 図版1 上 鶴瀬山遺跡 調査前遠景（北から）
下 鶴瀬山遺跡 調査前近景（西から）
- 図版2 上 鶴瀬山遺跡 穴穴建物SI01遺物出土状況（北から）
下 鶴瀬山遺跡 穴穴建物SI01遺物出土状況（西から）
- 図版3 上 鶴瀬山遺跡 穴穴建物SI01の屋外排水溝sd01の出土状況
下 鶴瀬山遺跡 穴穴建物SI01の内部造構および遺物出土状況
- 図版4 上 鶴瀬山遺跡 穴穴建物SI01完掘状況（北から）
下 鶴瀬山遺跡 穴穴建物SI01完掘状況（西から）
- 図版5 上 鶴瀬山遺跡 加工段01完掘状況（北から）
下 鶴瀬山遺跡 自然流路とその周辺の完掘状況（北から）
- 図版6 上 鶴瀬山遺跡 溝SD04とその周辺の完掘状況（北東から）
下 鶴瀬山遺跡 性格不明の造構SX01完掘状況（北から）
- 図版7 上 鶴瀬山遺跡 溝SD05と穴穴建物SI02完掘状況（北から）
下 鶴瀬山遺跡 調査終了後全景写真（西から）
- 図版8 上 大勝間山城跡 調査前遠景・左は佐陀川（南から）
下 大勝間山城跡 調査前近景（南東から）
- 図版9 上 大勝間山城跡 第一次調査後の上段平坦面（北から）
下 大勝間山城跡 第一次調査後の上、下段間の崖（東から）
- 図版10 上 大勝間山城跡 トレンチA A'
下 大勝間山城跡 トレンチB B'
- 図版11 上 大勝間山城跡 トレンチB—B'下半部・佐陀川開削時の揚土層検出状況
下 大勝間山城跡 第一次後の上段平坦面（北から）
- 図版12 上 大勝間山城跡 セクションC—C'
下 大勝間山城跡 第二次調査時の上・下段間の崖
- 図版13 上 大勝間山城跡 第一・二次調査完了後全景
下 大勝間山城跡 二刀屋蔵人を祀る祠（大勝間山城の南面丘陵裾にある）
- 図版14 上 鶴瀬山遺跡 穴穴建物SI01の屋外排水溝sd01出土土器
下 鶴瀬山遺跡 穴穴建物SI01とその周辺から出土したグリーンタフ玉末成品と原石
- 図版15 上 鶴瀬山遺跡 穴穴建物SI01の搅乱部から出土した土器
中（上）鶴瀬山遺跡 穴穴建物SI01西の灰色粘質土から出土した土器
中（下）鶴瀬山遺跡 穴穴建物SI01周辺から出土した石器、石材、鉄滓
下 鶴瀬山遺跡 加工段01P1出土土器
- 図版16 上 鶴瀬山遺跡 性格不明の造構SX02出土の土器
中 鶴瀬山遺跡 溝SD05出土の土器
下 鶴瀬山遺跡 造構に伴わない土器
- 図版17 上 鶴瀬山遺跡 敲石類
中 鶴瀬山遺跡 磨石
下 鶴瀬山遺跡 土師質の擂鉢



鶴瀬山遺跡 調査前遺景（北から）



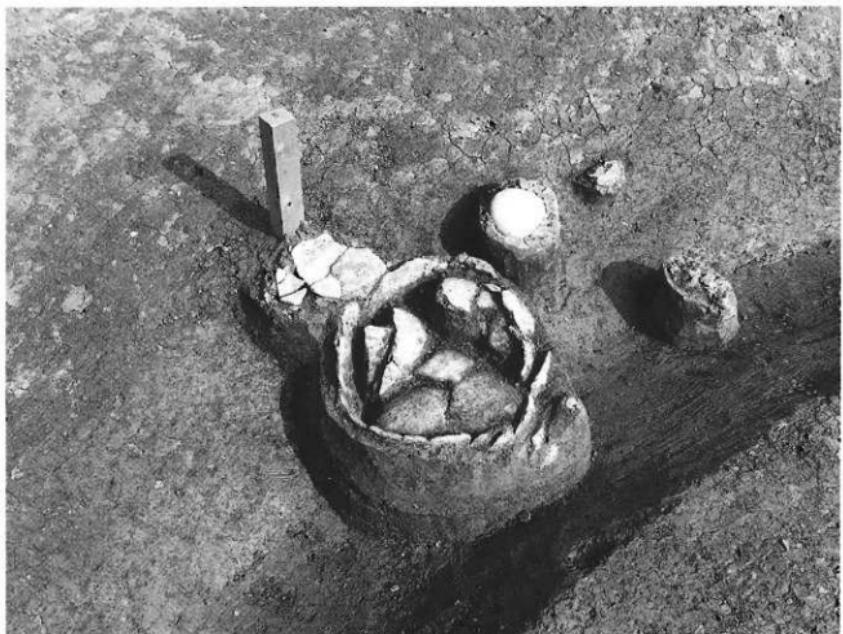
鶴瀬山遺跡 調査前近景（西から）



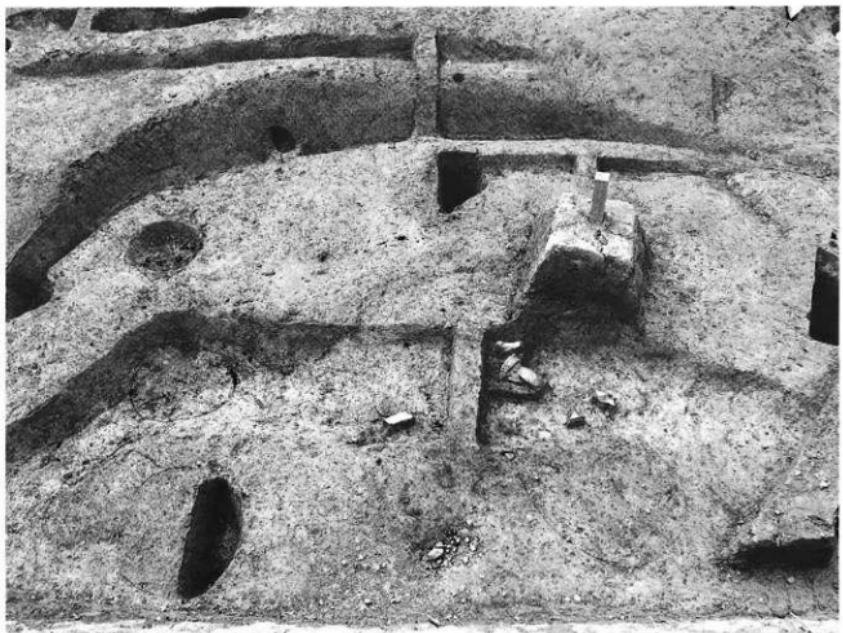
鶴淵山遺跡 積穴建物 S I 01遺物出土状況（北から）



鶴淵山遺跡 積穴建物 S I 01遺物出土状況（西から）



鶴瀬山遺跡 竪穴建物 S I 01の屋外排水溝 sd 01の壺出土状況



鶴瀬山遺跡 竪穴建物 S I 01の内部遺構および遺物出土状況



鶴瀬山遺跡 壁穴建物 S I 01完掘状況（北から）



鶴瀬山遺跡 壁穴建物 S I 01完掘状況（西から）



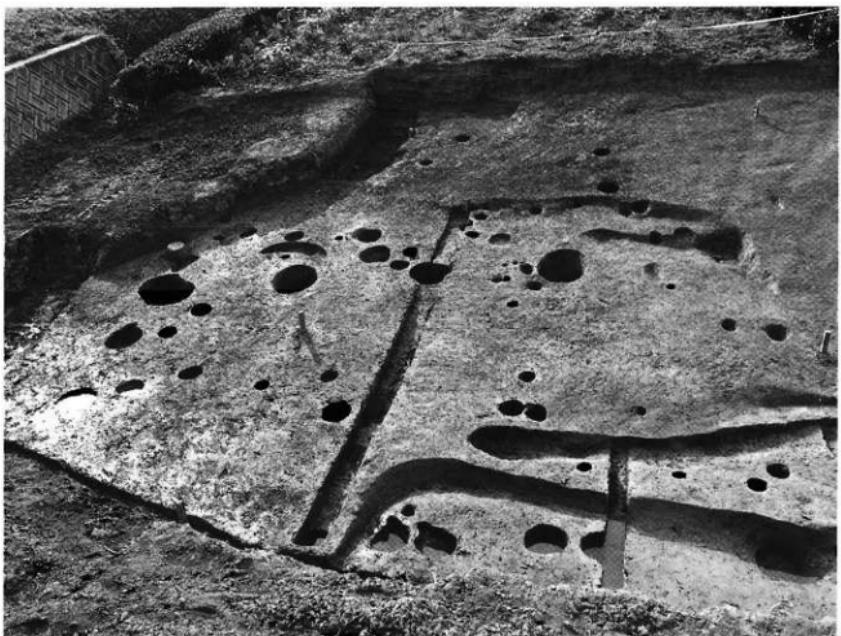
鶴瀬山遺跡 加工段01完掘状況（北から）



鶴瀬山遺跡 自然流路とその周辺の完掘状況（北から）



鶴灘山遺跡 溝 SD04とその周辺の完掘状況（北東から）



鶴灘山遺跡 性格不明の造構 SX01完掘状況（北から）



鶴瀧山遺跡 溝 SD 05 と竪穴建物 S I 02 完掘状況（北から）



鶴瀧山遺跡 調査終了後全景写真（西から）



大勝間山城跡 調査前遠景・左は佐陀川（南から）



大勝間山城跡 調査前近景（南東から）



大勝間山城跡 第一次調査後の上段平坦面（北から）



大勝間山城跡 第一次調査後の上、下段間の崖（東から）



大勝間山城跡 トレンチA—A'



大勝間山城跡 トレンチB—B'



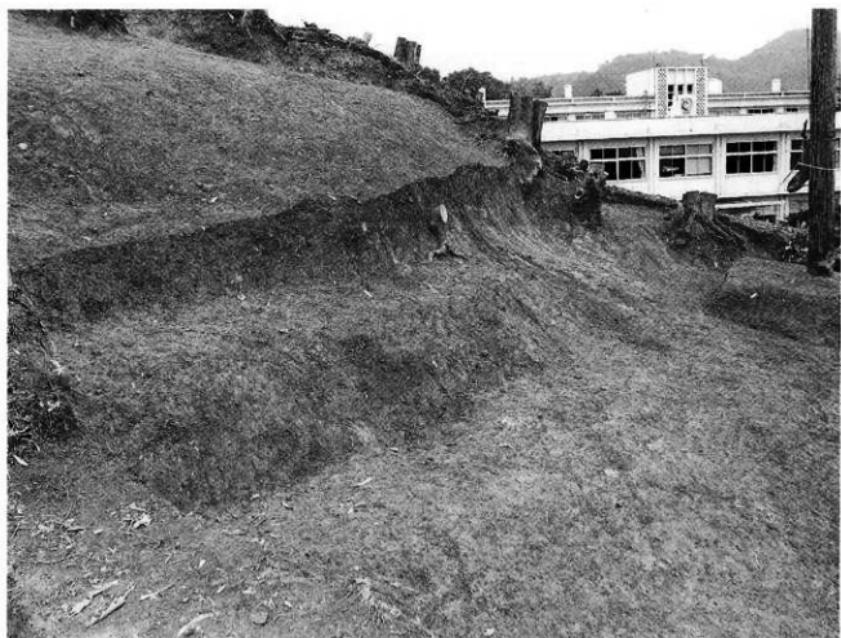
大勝間山城跡 トレンチ B-B'下半部・佐陀川開削時の揚土層検出状況



大勝間山城跡 第一次後の上段平坦面（北から）



大勝間山城跡 セクションC—C'



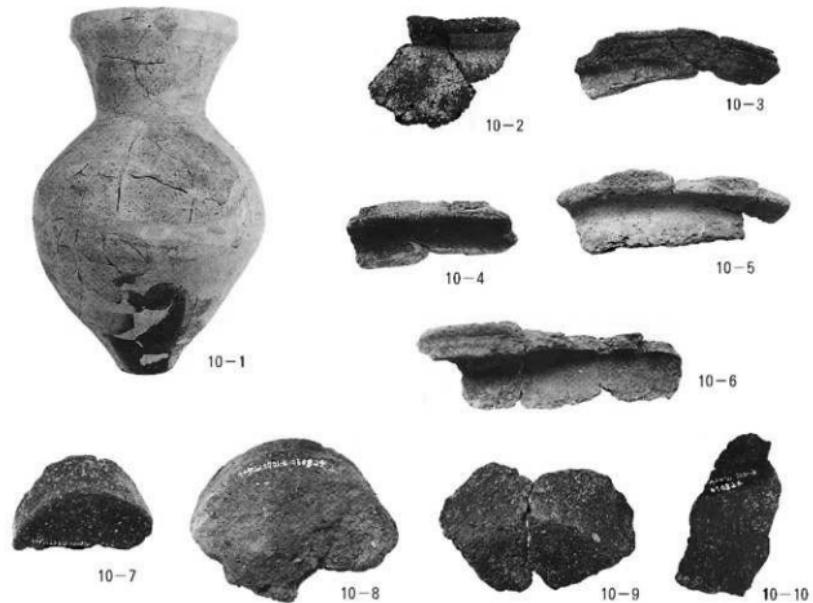
大勝間山城跡 第二次調査時の上・下段間の崖



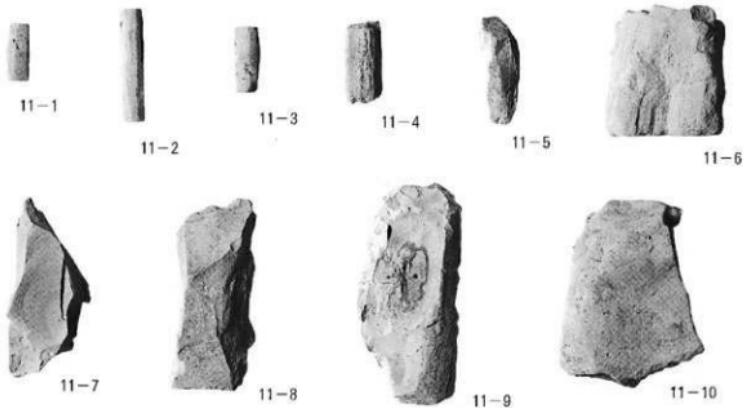
大勝間山城跡 第一・二次調査完了後全景



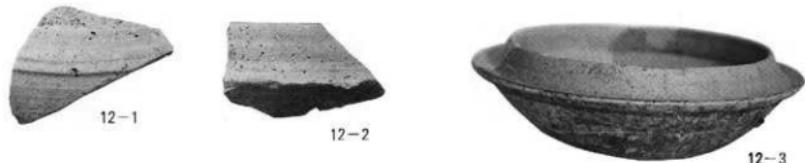
大勝間山城跡 三刀屋藏人を祀る祠（大勝間山城の南面丘陵裾にある）



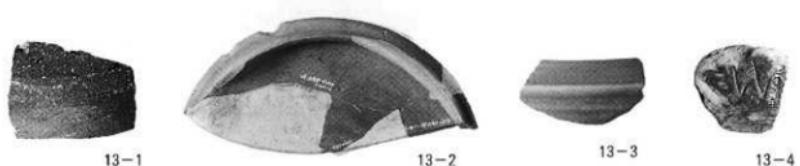
鶴瀬山遺跡 竪穴建物 S I 01の屋外排水溝 sd 01出土土器



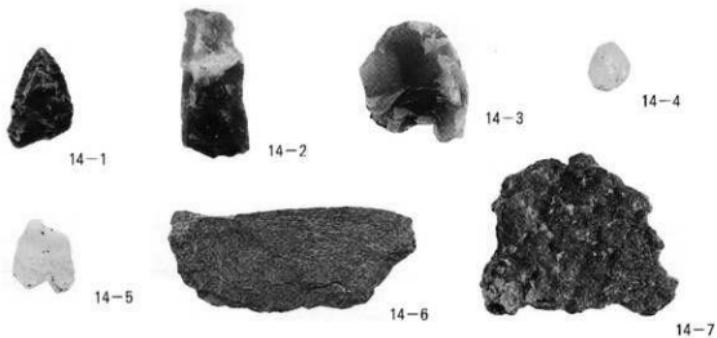
鶴瀬山遺跡 竪穴建物 S I 01とその周辺から出土したグリーンタフ玉未製品と原石



鶴灘山遺跡 竪穴建物 S I 01の攢乱部から出土した土器



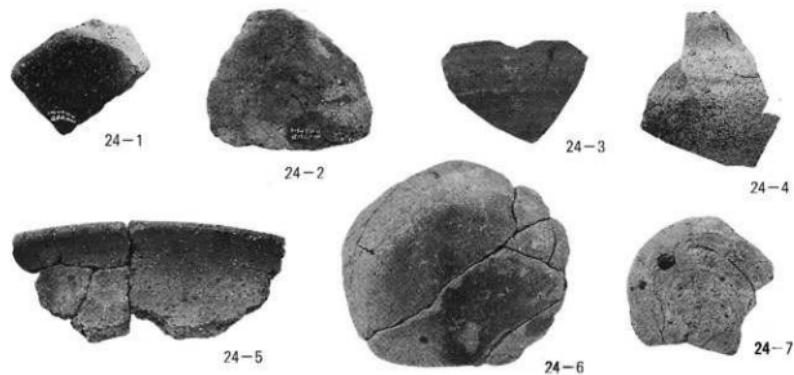
鶴灘山遺跡 竪穴建物 S I 01西の灰色粘質土から出土した土器



鶴灘山遺跡 竪穴建物 S I 01周辺から出土した石器、石材、鉄滓



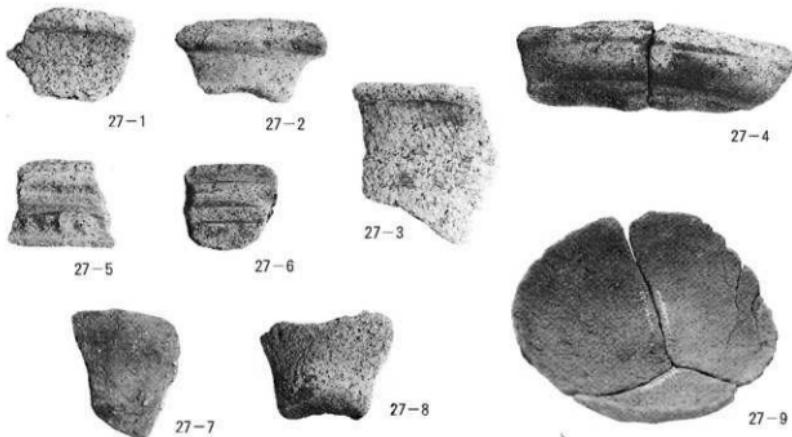
鶴灘山遺跡 加工段01P 1出土土器



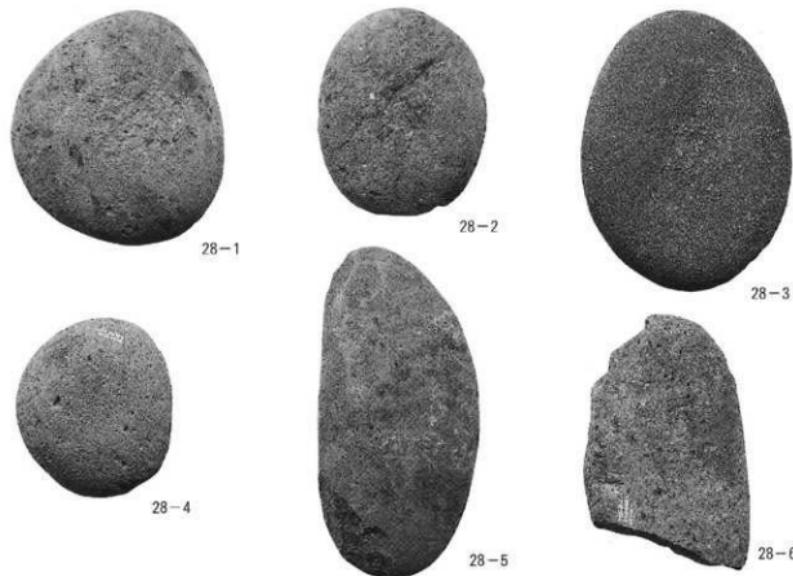
鶴瀬山遺跡 性格不明の遺構 SX02出土の土器



鶴瀬山遺跡 溝 SD05出土の土器



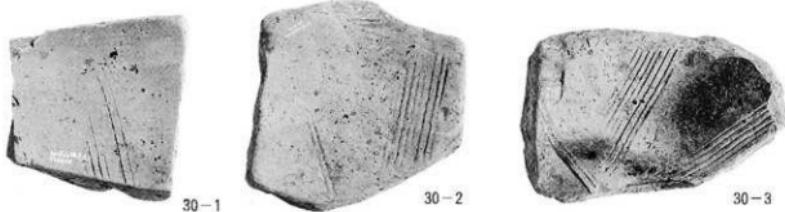
鶴瀬山遺跡 遺構に伴わない土器



鶴瀧山遺跡 敲石類



鶴瀧山遺跡 砧石



鶴瀧山遺跡 土師質の擂鉢

報告書抄録

ふりがな	うなだやまいせきほかはくつちょうさほうこくしょ							
書名	鵜灘山遺跡他発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	松江市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第112集							
編著者名	江川 幸子							
編集機関	松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団							
所在地	〒690-8510 島根県松江市末次町86			TEL 0852 (55) 5294				
	〒690-0017 島根県松江市西津田6 5 44			TEL 0852 (27) 6000				
発行年月日	2007年3月31日							
所収遺跡名 所在地	市町村	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		ふりがな	所在地					
鵜灘山遺跡 島根県 松江市 鹿島町	32201	K-104	35° 30' 50"	133° 0' 38"	2005. 8. 7 ~10. 21	400	学校建設	
大勝間山城跡 島根県 松江市 鹿島町	32201	K-42	35° 30' 50"	133° 0' 38"	2005. 11. 7 ~11. 9 2007. 2. 1 ~ 2. 8	100	学校建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
		鵜灘山遺跡 ほか	住居跡 ほか	弥生時代 古墳時代 中世	堅穴建物 加工段溝	弥生土器 土師器 須恵器 長木製品 石器		
大勝間山城跡	山城	中世	段状遺構	陶磁器類	佐陀川の掘土層あり			

松江市文化財調査報告書

平成19年3月31日

財団法人松江市教育文化振興事業団

発行
鳥取県松江市西陣町6-5 44

印刷
有限会社 松陽印刷所
鳥取県松江市宇治山2-3 11